

## 2. 高森町の植物



ササユリ (山の寺)



## 2.1



## 植物



(文・図・写真：堤 久)

「植物」とは、広く光合成をする生物全般を指し、非常に範囲が広いです。今回の高森町での調査では、普段身近に接している維管束植物（根や茎や葉をもつ植物）、すなわち、シダ植物と種子植物を対象にすることにしました。

調査を行い、まとめていくには分類していかなければなりません、本文ではミクロなゲノム解析から実証的に分類体系を構築する APG 体系 (Angiosperm Phylogeny Group) によることにしました。この体系は 1998 (平成 10) 年に公表された被子植物の新しい分類体系です。具体的にはこの体系に基づいて編纂された著書『日本維管束植物目録』(米倉浩司, 2012) に従うこととし、『長野県植物目録』(長野県植物目録編纂委員会, 2017) 及び、『BG Plants 和名-学名インデックス』(YList), <http://ylist.info>』(米倉浩司・梶田忠, 2003-) も参考にしました。その結果、既刊の書とは科の名称や配列が変わったり、学名が異なったりすることが少なくありませんが、この APG 体系は今後の日本の植物名のスタンダードになるものと思われます。


**維管束植物とは**

シダ植物・・・ワラビ・ゼンマイなど

種子植物

裸子植物・・・イチヨウ・アカマツなど

被子植物

単子葉植物・・・ササユリ・ギンランなど

双子葉植物・・・ナズナ・クリなど



## 高森町の植物概要

西に中央アルプス、東に南アルプスに囲まれ、天竜川がその間を北から南に流下する信州の伊那谷。高森町はこの伊那谷の南部、天竜川の西岸に広がる段丘の町です。西に中央アルプスに続く本高森山、前高森山、吉田山がそびえ、高森町はこの山稜から東の天竜川に向かって、ゆるやかに扇状地をつくり広がっています。この扇状地に、山岳から流れ下る中小の河川が天竜川の支流となって注ぎ込んでいます。支流は北から大沢川、寺沢川、田沢川、胡麻目川、大島川、南大島川であり、扇状地はこれらの支流の掘り込みによって南北にいくつも分断されています。最低標高地は下市田の天竜川河原の標高約 406m、最高標高地は本高森山の約 1,890.1 m で、標高較差は 1,484m です。

このような変化に富んだ特有の地形により、様々な植物が自生しています。

まず、垂直分布に応じて生育する植物をみてみましょう。

天竜川の河原や土手には在来種のツルヨシ、コゴメヤナギ、タチヤナギ、オニグルミなどに混じって多くの帰化植物が進入してきています。オオキンケイギク、メリケンカルガヤ、シナダレスズメガヤ、メマツヨイグサ、カモガヤ、ムシトリナデシコ、オオウシノケグサなどの草本や、ニセアカシア、イタチハギなどの木本です。

天竜川の堤防の右岸、かつての氾濫原は水田や畑、果樹園、住宅地、商業施設に変わり、低位段丘、

## 2. 高森町の植物

### 維管束植物

段丘崖、中位段丘へと続きます。段丘崖はモウソウチクやマダケ、ハチクの竹林、スギ、ヒノキの植栽林やコナラ、クヌギ、アベマキなどが混生する雑木林が成立しています。ここにはケヤキ、エドヒガン、カスミザクラ、エノキ、フモトミズナラなどの落葉広葉樹、カヤ、モミ、イチイなどの常緑針葉樹が自生しています。また、天竜川沿いに北上してきたアラカシ、シラカシ、ヤブツバキ、チャノキ、モミ、カヤ、アオキ、タラヨウ、ヒイラギ、ナンテンなどの暖温帯性の常緑樹や、ベニシダ、クマワラビ、コバノイシカグマ、ハカタシダ、イノデなどのシダ類、ヤブコウジ、ヤブラン、スルガテンナンショウ、ウバユリなどの暖温帯性の草本が生育しています。

段丘崖を上がりほぼ標高 500 m から主要地方道の飯島・飯田線が通過する標高 600 m ほどでは、西方に向かってなだらかな斜面となっていく。この地域の大部分が居住地や田畑、果樹園になっており、町の生活の中心になっています。



若葉が紅色のベニシダ

この地を支流が形成した谷や河岸斜面にはヒノキやスギ、竹類の植栽林が成立し、その間に雑木林が散在し二次林の植生がみられます。ここには、コナラ、クヌギ、アベマキ、エドヒガン、カスミザクラなどの落葉広葉樹が生え、林床にはアラカシやシラカシの幼木やベニシダ、イノデ、チゴユリ、ハウチャクソウ、ナルコユリ、シュンラン、ヤマザトマムシグサ、ヤマホトトギス、ヤブミョウウガなどが自生します。



天竜川の対岸から望む高森町遠景

標高 700 m ほどからは山麓の急斜面に移り、植生は植栽林が多くなります。尾根にはアカマツ林、山腹にはカラマツ林、谷にはスギ林が成立しています。ここには支流沿いに林道が標高 1,000 m 以上まで奥深く入り込んでおり、林道小沼大沢線、林道吉原線、林道不動滝線、林道弓矢沢線の林縁には、キブシ、アブラチャン、オオバアサガラ、ミヤマヤシャブシなど様々な植物がみられます。



シカが食べないオオバアサガラ

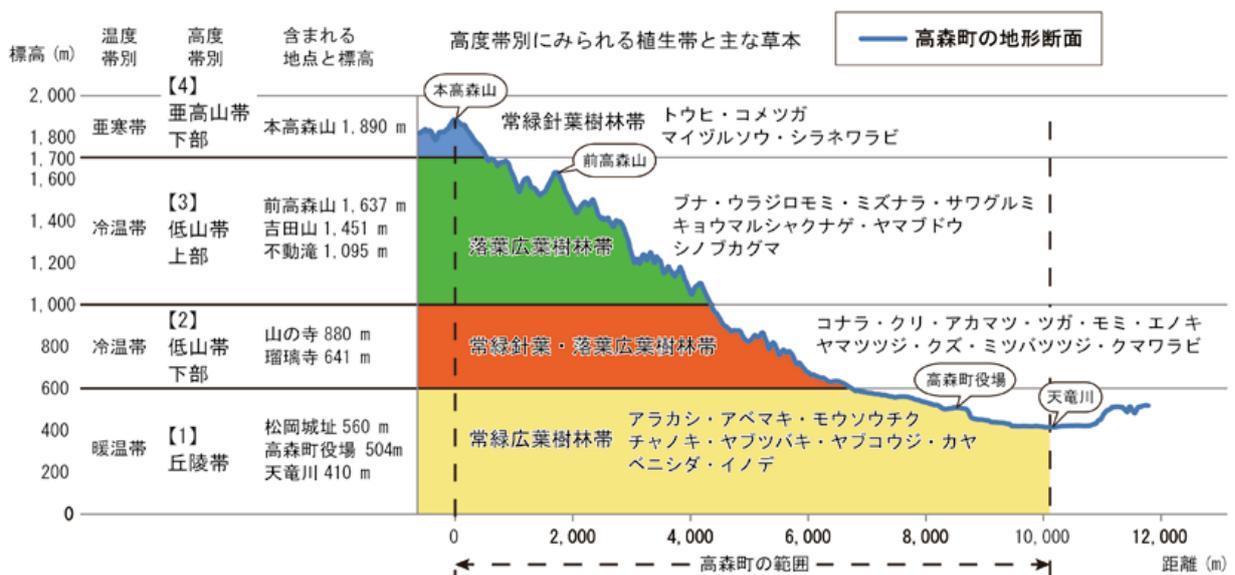
標高 1,000 m を越すと、植栽林の間隙にブナの生育がみられます。現在はアカマツやカラマツの植栽林に代わっていますが、かつてはこの辺から低山帯上部になり、ブナやウラジロモミを主体としたブナ林の原生林が標高 1,600m ほどにあったことが伺えます。



伐採を免れた尾根筋のブナ林 (吉田山)

標高 1,600m から本高森山山頂まではカラマツ、ウラジロモミの植栽林になります。間隙にコメツガやトウヒがみられることから、この付近から亜高山帯で常緑針葉樹林帯になるものと思われませんが、主要な樹種、オオシラビソ、シラビソを認めることができず、常緑針葉樹林帯の林相を認めることはありません。

以上の植物相を高度による帯別からまとめた垂直分布図が以下になります。



天竜川河原～本高森山の垂直分布

## 2. 高森町の植物

### 【1】丘陵帯

標高およそ 410 ~ 600 m はアラカシ、シラカシ、モウソウチク、ヤブツバキ、ヤブコウジ、ベニシダなどの暖温帯性の植物で特徴づけられる丘陵帯です。



カシ林

標高およそ 600 ~ 1,700 m までは低山帯で、標高により、低山帯下部と上部に分けられます。

### 【2】低山帯下部

標高およそ 600 ~ 1,000 m は、コナラ、クリ、ケヤキなどの落葉広葉樹やツガ、モミ、アカマツなどの常緑針葉樹が自生する低山帯下部です。主要地方道飯島・飯田線から本高森山登山口付近、不動滝付近を含んでいて、多くは住宅地、果樹園、田畑から山地の急斜面に続いています。



アカマツ林 (吉田山)

### 【3】低山帯上部

標高およそ 1,000 ~ 1,700 m は、ミズナラ、シラカンバ、ブナ、イヌブナなどの落葉広葉樹やウラジロモミなどの常緑針葉樹が自生する低山帯上部です。この帯は吉田山、前高森山を含んだ山地で、ほとんどが林で覆われていますが、現状は多くがカラマツやアカマツ、ウラジロモミなどの植栽林です。



カラマツ林

### 【4】亜高山帯下部

標高 1,700 m から本高森山山頂 1,890m まではカラマツ、ウラジロモミの植栽林です。その間隙にコメツガ、トウヒ、ダケカンバ、ミネカエデなどの亜高山帯性の樹種が自生しているので、ここが亜高山針葉樹林帯であることが伺えます。ここでは亜高山帯の主要なシラビソ、オオシラビソの樹種が認められませんが、これは伐採・植林によって本来の森林の姿が失われたものと思われる。



亜高山の主要な樹木 コメツガ

次のページからは、高森町内にみられる特徴的な植物をトピックとして紹介していきます。



## 春を呼ぶヤナギ類



逆光に映えるネコヤナギの花穂



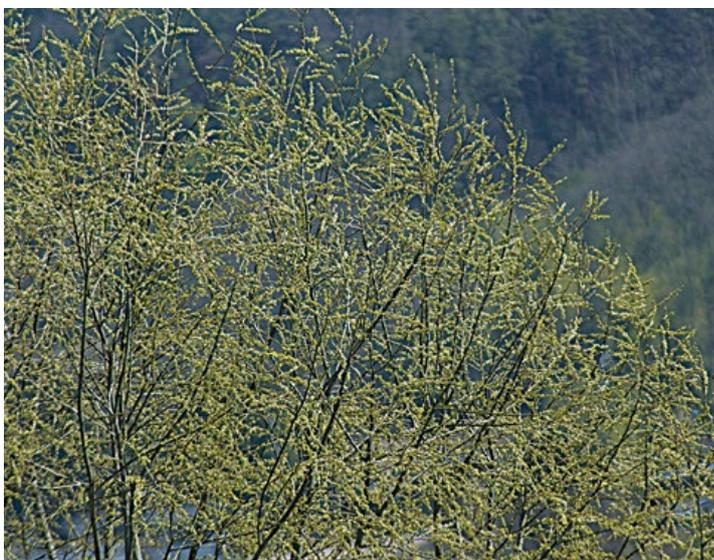
花穂のクローズアップ

### ネコヤナギ

落葉低木。川岸に多く、水際に生育して株元が水に浸かるところに育ちます。葉は長楕円形で、裏は白みがかっています。花期は3～4月。雌雄異株<sup>しゆういしゆ</sup>で、雄株と雌株がそれぞれ雄花と雌花を咲かせます。葉より先に赤褐色の鱗片<sup>りんぺん</sup>が取れて白い毛を密生した雄花穂や雌花穂が現れます。他のヤナギ類の開花よりも一足早く花を咲かせることから、春の訪れを告げる植物とされています。初夏には綿毛につつまれた種子を飛ばします。銀白色の毛で目立つ花穂が特徴的であり、「ネコヤナギ」の和名はこれをネコの尾に見立てたことによります。花穂は生け花にもよく用いられます。

#### 主な生育地と標高

林道不動滝線 770 m 林道不動滝線床波沢駐車場 980 m 増野・大沢川沿い 770 m 山吹・越田 580 m  
天竜自動車学校横天竜川河原 420 m 万年橋付近 440 m



花が咲いているコゴメヤナギ

### コゴメヤナギ

日本固有種で川岸に生える落葉高木。葉は長楕円形で裏は白みがかっています。雌雄異株。早春、3～4月に葉より先に赤褐色の鱗片が取れて白い毛を密生した雄花穂<sup>きくか</sup>や雌花穂が現れます。果実は蒴果で、5月に熟すと裂開し綿毛のついた種子を飛ばします。

高木性のヤナギの中でもっとも葉が小さいです。

#### 主な生育地と標高

下市田工業団地横天竜川河原 420 m  
明神橋付近 420 m  
天竜自動車学校横天竜川河原 420 m



早春の里山に咲く可憐な草花



陽光に開花したカタクリ



山に咲くシュンラン



芽生え



種子



シュンラン展示会

■ カタクリ

ユリ科の球根性多年草。球根は鱗茎<sup>りんけい</sup>で白色の長楕円形。花茎は10～20cm。葉は普通2枚が花茎下部につき、長楕円形ないし楕円形で淡緑色です。暗紫色の斑紋のあるものが多く、早春に雪解けとともに開花します。花は花茎の先に1、2個開き、花被<sup>かひ</sup>は6枚。紅紫色で内側基部近くにW字状の斑紋があります。果実は3稜ある円形で、エライオソームがついています。夏季には茎葉は枯れて夏眠に入ります。町内では山地帯下部の林床にまれに産しますが、筆者が観察に行った時には群落のすべての花は失われていました。人間の心無い仕業か、シカによる摂食でしょうか。かつては鱗茎から良質のデンプン<sup>でんぷん</sup>をとり、かたくり粉と称しました。葉草として強壯剤、胃腸薬、解毒剤に用います。古名のカタカゴがカタコユリとなり、転訛<sup>てんか</sup>してカタクリとなったとされます。

■ シュンラン

日本を代表する野生ラン。北海道から九州までに分布します。シンビジウムのなかまで、主に里山や人里に近い山地の雑木林などに自生します。早春、膜状の鱗片<sup>りんぺん</sup>のある肉質の花茎を出し、1花を頂生<sup>しんべん</sup>します。花は径3～4cmで淡緑色、唇弁は白く濃紫色の斑点があります。東洋ランの一種として古くから季節の花や祝いの花として親しまれ、多数の園芸品種が知られます。花は刺身のつまなどとし、また、塩漬にして湯を入れて飲料にします。



塩漬けたシュンラン



## 里地・里山に春を告げるコブシ類



コブシ



上：コブシの花 下：コブシの実

### コブシ

早春に他の木々に先駆けて白い花を梢いっぱい咲かせます。果実は集合果で、にぎりこぶし状のデコボコになります。この果実の形状がコブシの名前の由来です。町内では早春になると、段丘崖や山麓の雑木林のあちこちに、白い花がみられます。

主な生育地と標高 市の沢線・駒場～新田 505～550m 湯ヶ洞線北斜面 490m  
山吹下平橋付近 450m 林道出原線 815m 牛牧浄化センター 560m



タムシバの花



タムシバの実

### タムシバ

町内では標高 800 m を越えた山地に生育。別名を「ニオイコブシ」といい、花には芳香があります。早春に白い 6 弁花を葉に先立って咲かせます。他に「カムシバ」の別名をもちます。こちらは「噛む柴」で、葉を噛むとキシリトールのような甘味がするのためにこの名前がついたのです。これが転じて「タムシバ」となったといわれます。

主な生育地と標高 前高森山 1,060 m 吉田山～山の寺 1,000～1,245 m 本高森山登山路 1,230 m



## 早春に黄色花を枝いっぱいにつける木々



### ■ ダンコウバイ

ウコンバナともいいます。山地の岩場や尾根に普通に生えます。葉は広楕円形でやや厚く、多くは浅く3裂します。3～4月、葉の出る前に黄色で小さな6弁花がかたまつて咲きます。雄花のおしべは9本。果実は小さく球状で9～10月赤熟します。庭木、生花とします。

ダンコウバイ

### ■ ヤマコウバシ

山地の緩やかな斜面に普通に生えます。高さ約5m、葉は裂くと芳香がします。4～5月、<sup>ようえき</sup>葉腋から花序を出し、黄白色花を開きます。果実は球形の液果で径約7mm、黒く熟します。名は枝を折ると芳香があることによります。枯葉は翌年の3～4月まで落葉しないので、「落ちない」ということから合格祈願に使われます。

ヤマコウバシ



アブラチャン

### ■ アブラチャン

山地溪流沿いに普通に生え、高さ3mに達します。花は3～4月、葉が出る前に開きます。花は短枝の基部から二つずつ出た小形の花序につき、淡黄緑色です。実は球形で大きく、直径1.5cmで1個の種子を放出します。名は実から油をとり、また材が油を含みよく燃えることによります。



### 3種の葉の比較



ダンコウバイ

アブラチャン

ヤマコウバシ



## らんまんと咲く桜花



エドヒガン (松源寺)



冬木の中に咲くエドヒガンの自然木 (松岡城址)



葉より先に花が咲くエドヒガン

### エドヒガン

4月初めに葉の出る前に淡紅白色、径約3cmの花が散形状に開きます。萼筒の基部が円く膨らむのが特徴です。本州、四国、九州の山地に野生します。剛健なサクラで各地に老木が知られます。雑木林に自生し広く植栽もされます。関東地方に多く生育しているのでアズマヒガン、また、葉のないうちに花が開くので、歯のない<sup>うば</sup>姥に例えてウバヒガン(姥彼岸)ともいいます。

栽培

松源寺 瑠璃寺 子安神社 松岡城址



新緑の中に咲くカスミザクラ

出葉とともに花咲く  
カスミザクラ緑色から赤色、黒色に熟  
するカスミザクラの実

### カスミザクラ

エドヒガンに遅れること10日ほど、4月中旬に白色または淡紅白色の花を葉と同時に開きます。北海道、本州、四国、九州の山地に野生し、町内でも雑木林に多く自生しています。ヤマザクラに似て葉や花に毛があるのでケヤマザクラともいいます。

町内でみられるサクラと呼ばれるものは主に栽培種のソメイヨシノ（学校や公園に植栽）、エドヒガン（寺院に植栽、山野に自生）、カスミザクラ（山野に自生）です。

山野を紅色で飾るミツバツツジ類



ミツバツツジ



トウゴクミツバツツジ

■ ミツバツツジ

関東、東海地方の山地に自生。町内では段丘崖や痩せた尾根に生育。別名イワマツツジともよばれます。高さ2～4m、葉は3枚、枝先につきます。4月、ソメイヨシノが咲くころ、葉の出る前に紅紫色で径3～4cmの花を咲かせます。おしべは5本で花柱とともに毛がありません。



ミツバツツジの種子

■ トウゴクミツバツツジ

関東地方を中心に太平洋側の山地に分布。町内では標高700mを越すところから前高森山、吉田山の山地に出現します。樹高は4mに達し、よく分枝し、枝は車輪状に出ます。葉は枝先に3枚が輪生し、幅広の菱形で葉柄とともに毛を密生します。春に、葉の出る前に枝先に1～2個ずつの紅紫色で広い漏斗形の花をつけます。花柱の下半分に腺毛があり、おしべは10本です。

2種の葉の比較



ミツバツツジ

トウゴクミツバツツジ



ミツバツツジ・トウゴクミツバツツジの確認地点

長野県に分布するミツバツツジ類

ミツバツツジ類はミツバツツジ、コバノミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ、ダイセンミツバツツジ、ユキグニミツバツツジの5種が分布しますが、町内には上記の2種が自生します。高森公園にはコバノミツバツツジが植栽されています。

## 穂状の花を咲かせるサクラ類



上：ウワミズザクラの花 下：ウワミズザクラの実

### ウワミズザクラ

北海道南西部、本州、四国、九州に分布、高さ10～20m。花はカスミザクラが開花した直後の4～5月に咲きます。長さ10～20cmの総状花序に白色で径6～10mmの小花が多数集まります。花序の軸に数枚の葉があります。果実は卵円形でやや先がとがり、7～8月に黄赤色から黒紫色に熟します。この実を小鳥が集まってついでみまます。新潟県の地方では蕾の花穂や緑色の果実を塩漬けにして、「あんにご」とよんで食べます。古代、シカの肩の骨を焼いて占いをする際に用いられたハハカの木(『古事記』)はこのサクラです。

#### 主な生育地と標高

林道出原線 980 m 月夜平 660 m  
 萩山神社南洞 470 m 湯ヶ洞線北斜面 490 m  
 山吹・新田原 580 m



上：イヌザクラの花 下：イヌザクラの実

### イヌザクラ

本州、四国、九州の山野に野生し、朝鮮半島南の済州島にも分布。高さ10～18m、4～5月に葉が出てから、径約7mmの小さい白色の5弁花が、長さ5～10cmの総状花序に多数集まって開きます。花序の軸には葉がないので、葉のあるウワミズザクラと見分けられます。果実は卵円形でやや先がとがり、7月ごろ黄赤色から黒紫色に熟します。サクラの一種ですが、花が見劣りするのでこの名です。樹皮や小枝に臭気があるのでクソザクラ、ヘッピーザクラなどともよばれます。

#### 主な生育地と標高

胡麻目川沿い 480 m 萩山神社南洞 470 m  
 本学神社 680 m



左：ウワミズザクラの果穂 右：イヌザクラの果穂



暖地性のツバキ類



ヤブツバキの花



開花したチャ



ヤブツバキの種子



チャの種子

■ ヤブツバキ

東北以西の暖地に生育する常緑の小高木で照葉樹林の代表的な種です。ヤブツバキの葉は革質でやや堅く、表面は光沢があり、特に若葉のときには光り輝くほどです。常緑樹の多くは表面にクチクラ層があり、照葉樹と呼ばれますが、ヤブツバキの葉はその典型です。花は冬から早春にかけて咲きます。この季節は花を訪れる昆虫が少なく、花粉の媒介は主にメジロなどの小鳥が行います。ヤブツバキの果実は大きく、直径4～5cm。果皮は厚く、熟すと3つに裂開して中から大きな種子がのぞきます。ツバキの種子は油を大量に含んでおり、ツバキ油が採取されます。ヤブツバキは町内では神社や人家周辺に多く生育しています。

■ 主な生育地と標高

下市田・中谷 410m 竜口八幡神社 460m  
 萩山神社 500m 新田諏訪神社 620m  
 泰山神社 500m 松岡城址間ヶ沢 450m

■ チャ(チャノキ)

ツバキ科の常緑低木。中国大陸原産で、日本をはじめ世界各地で製茶のため栽培され、また庭木にも用いられます。自生するものは高さ6～8mに達しますが、栽培のものは刈り込むため1mぐらいいにとどまり、密に分枝します。葉は表面は濃緑色で光沢があり、鋸歯があります。秋季から冬季にかけ、葉腋に径2cmほどの1～3個の花が下向きに開きます。

葉を摘んで飲料の茶をつくり、またカフェイン製造の原料とします。茶は昔から伝わる最も一般的な飲み物で、緑茶、紅茶、ウーロン茶などの種類があります。

町内に自生するチャは人家周辺に生育しており、栽培していたものが逸脱したものと思われる。

■ 主な生育地と標高

牛牧浄化センター南斜面 520m 萩山神社 500m  
 胡麻目川沿岸 505m 下市田4区洞 470m  
 松岡城址間ヶ沢 480m 順礼沢 520m

奇妙な花を咲かせるマムシグサ類



スルガテンナンショウ

中部地方の太平洋側の山地に分布し、東海地方特産。長野県では南部に生えます。筒の中の薄緑色の棒の先が曲がっているのが特徴です。町内ではもっとも多くみられます。



ヤマザトマムシグサ

里地・里山に分布。<sup>とりうちぼうし</sup>鳥打帽子をかぶったような形。筒の中の暗紫色の棒の先は大きく丸まります。<sup>ぶつえんぼう</sup>仏炎苞が緑色のものはミドリヤマザトマムシグサといいます。

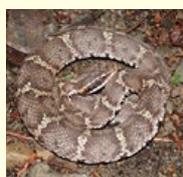


キタマムシグサ

中部地方以北から北海道に分布。標高 600 m 以上の山地の林縁や林床に生えます。筒の中の白い棒の先が小さく丸まっています。偽茎の斑はあまり目立ちません。



マムシの模様によく似ている茎



マムシ



雄花 雌花

雄株と雌株があり、ハエのなかまによって雄花の花粉が雌花に運ばれることにより実ができます。



マムシグサ 3 種の確認地点



樹陰でひそやかに咲く草花



チゴユリ



翌年に目を出す地下茎



エダウチチゴユリ

チゴユリ

丘陵から低山の林床に普通に生えるイヌサフラン科の多年草。早春植物の一つで、茎は高さ20～35cmで、普通枝分れしません。3～5月、茎の先に花を1～3個上向きに開きます。果実は球形の液果で、径約1cm。8～9月に黒色に熟します。

地下茎による栄養繁殖をさかんに行き、冬には親個体は枯死しますが、いくつもの地下茎の先端だけが生き残って翌年地上部を出します。多年草とはいってもこのような生活形は擬似一年草と呼ばれます。チゴユリが群生するのはこの繁殖形式によるのです。チゴユリにはエダウチチゴユリといって、茎の上部が分岐して、それぞれの枝に花をつけるものがあります。町内にもこれが産しますが、二種の区別をしません。

主な生育地と標高

本高森山登山路 1,085m 天白公園 635 m  
林道出原線起点 740 m 林道二又沢線 690 m  
新田原 570 m



ホウチャクソウ



ほうちやく  
宝鐸

ホウチャクソウ

林内の陰地に生えるイヌサフラン科の多年草。群生することが多いです。茎は斜上し高さ30～60cm、ときに1～2回分枝します。晩春、枝先に長さ3cm内外の筒形の花を1～3個下垂してつけます。花被片は6枚、白色で上半部は緑色を帯びます。液果は球形で径約1cm、黒熟します。同属のチゴユリによく似ていますが、より大形です。和名は、花のつく形を宝鐸（堂塔の四方の軒に吊るす大形の風鈴）に見立てたものです。若芽は瑞々しいですが弱い毒性があるので、採取は控えるようにしましょう。

主な生育地と標高

順礼沢 490 m 山の寺水源地 850 m  
山吹・正木 635 m 松岡城址銚子ヶ洞 530 m  
山の寺参道 750 m



## 春の美味しいウコギ類



コシアブラ



開葉直前のコシアブラ



コシアブラの天ぷら

### ■ コシアブラ

北海道～九州の山地の林縁や疎林など、日の当たる場所に生えます。ブナの木が生い茂る林で採れることが多いです。葉は互生し、5小葉からなる掌状複葉しょうじょうふくようです。春先に伸びる独特の香りを持つ新芽は食用となり、山菜として扱われます。天ぷらにすると美味しく、また、おひたしや和え物などにも調理されます。塩漬けにして保存食にもされます。

夏、枝先に淡黄色の小花が球状にまとまった散形花序を多数つけます。果実は球形で黒紫色に熟します。材は白く木目が細かく光沢があるので、細工物、箸、楊枝はし ようじなどの材料になります。



実をつけたタラノキ



開葉のタラノメ



鋭い棘のタラノキ



タラノメの天ぷら

### ■ タラノキ

北海道～九州、東アジアに分布し、おもに低地の二次林に生えます。茎はあまり分枝せず、茎や葉に大小の鋭いとげがあります。葉は大型で2回羽状複葉、多数の小葉は卵形で、裏面は白いです。8～9月、茎の頂に大型の円錐花序をつけ、白色5弁の小花を多数開きます。果実は小球形で10～11月に黒熟します。若芽(タラノメ、タランボなど)を山菜として食用にします。若芽を天ぷらにするのが一般的で、口いっぱい広がる独特の芳香が特徴的です。湯がいておひたしやゴマの和え物にしたり、油で炒めて食べてもよいです。タラノメを全部摘み取ると木は枯れてしまうので、いくつかの芽は残しましょう。



## 春の味覚のシダ類



ワラビのおひたし

### ■ ワラビ

シダ植物で山菜の一種。草原に普通に生えます。食べるためにはアク抜きが必要です。アク抜きはワラビの上から重曹や木灰をふりかけ、その上から熱湯をそそぎ、蓋をして一晩置きます。翌日きれいな水で洗ったアクを流し、調理します。おひたしや漬物、味噌汁の具などとして食べます。近年、アクの少ないワラビが田畑で栽培されるようになりました。ワラビは根茎で繁殖しますが、成長したワラビは葉裏に胞子をつけ、胞子を散らして繁殖もします。



上：芽吹いたワラビ 下：成長したワラビ



上：芽吹いたクサソテツ 下：成長したクサソテツ

### ■ クサソテツ

シダ植物の一種で、湿原、川沿いなどの湿地に生育します。根茎で繁殖して群生します。南大島川、大沢川などの河川敷に見られます。若芽はコゴミと呼び、山菜となります。5月上旬から6月中旬に渦巻状に丸まった幼葉を採取し、おひたし、サラダ、ゴマ和えなどの和え物、天ぷらなどにして食べます。ワラビほど強くない独特の「ぬめり」があり、ゼンマイなどと違ってアクがないため調理が容易です。



コゴミ(クサソテツ)のおひたし



## 野原や土手に生えるネギ類



ノビルの若葉



アサツキの若葉 (3月)



ノビルの花とむかご



アサツキの花 (6月)



ノビルの料理 (生食・酸味噌和え・てんぷら・しょうが醤油和え)



採取したアサツキ

### ノビル

ヒガンバナ科の球根性多年草。畑や道ばた、土手などに群生しています。鱗茎は直径1～2cmの球形でミネラルやビタミンなどの栄養をたくさん含みます。春に山菜として食用されます。5～6月、茎頂に花序を出し、淡紅色花を多数つけます。花びらは6枚、長さ4～6mm。普通大部分の花は柄のないむかごになり、落下して個体をつくります。むかごの散布以外に分球でも繁殖します。

### アサツキ

ヒガンバナ科ネギ属の球根性多年草。ネギよりも色が薄く、食用とされるネギ類の中では最も細い葉を持ちます。早春に芽吹いて成長し、夏に開花後枯れますが、秋にまた芽を出し、冬に枯れます。そのため、春と秋の2回採取して食用できます。アサツキは、ネギの類の中で、味も栄養も優れており、おひたしや酢味噌和え、吸い物、薬味として利用できます。鱗茎は生のまま味噌をつけて食べるのもおいしいです。和名アサツキは、ネギ(葱)に対して色が薄い(浅い)ことからきています。



段丘崖や河岸に繁茂するマダケ類



モウソウチク林 (8月)

■ モウソウチク・マダケ・ハチク

長野県で伊那谷は木曾谷とならんでマダケ類が繁茂しています。町内にはマダケ類のモウソウチク、マダケ、ハチクの3種が栽培や野生化して繁茂しています。中には管理が行き届かず、雑木林やヒノキ林に進入するものもあります。

筍は早春から初夏まで、種類ごとに順を追って出筍し、賞味されます。出筍の後は葉が黄葉し「竹の秋」を迎え、古い葉と新しい葉が入れかわります。

竹の秋 (6月)



モウソウチク (3~4月)



マダケ (4~5月)



ハチク (5~6月)

## 初夏の里山を飾るツツジ類の木々



満開のヤマツツジ



ヤマツツジの花のクローズアップ

### ヤマツツジ

ツツジ科の半落葉低木。北海道南部～九州の低山に普通に生えます。疎林内、林縁、日当たりのよい尾根筋、草原などに生育します。日本の野生ツツジの代表種で、分布域がもっとも広いです。

高さ1～3mで、ミツバツツジの花が終わった後の5月、枝先に2～3個の花を開きます。花の色は個体により微妙に異なります。花の中央にある濃い色の模様は、虫に蜜の位置を知らせる蜜標といわれます。



ヤマツツジの確認地点

### レンゲツツジ

ツツジ科の落葉低木。北海道～九州の山地に普通に見られます。高さ1～2m。5～6月、枝先に2～8個の花を開きます。花冠は漏斗状で径5～6cm、朱<sup>かかん</sup>橙色でおしべ5本、花糸の基部には白毛があります。花冠の黄色のものをキレンゲツツジといいます。葉や根皮にアセビと同様に有毒成分があります。

#### 主な生育地と標高

本高森山登山路 1,360m  
林道出原線起点 740m 新田原 600m  
高森カントリークラブ北側 830m  
林道吉原線 900m



満開のレンゲツツジ



晩秋から晩春に生きる越年草のイヌノフグリ類



オオイヌノフグリの果実



オオイヌノフグリの花



オオイヌノフグリの群落

オオイヌノフグリ

道ばたや畑の畦道などに見られる雑草。秋に芽を出して他の植物が繁茂しない冬に横に伸びて群生し、早春に多数の花をつけて、春の終わりには枯れてしまいます。夏の間は種子で過ごします。寒さに耐えるため、細胞内の糖濃度を高める機能を持ち、葉と茎に生える短い毛で雪と霜を遠ざけて保温します。和名はイヌノフグリに似てそれより大きいために付けられました。フグリとは陰囊のことで、イヌノフグリの果実の形が雄犬の陰囊に似ていることからこの名前が付いたのです。オオイヌノフグリの果実はハート型で、フグリに似てはいなく、花は両側に2本のおしべがあり真ん中に1本のめしべがあります。

主な生育地と標高

山吹・越田 580 m ほたるパーク山吹西側 430 m 胡麻目大橋北斜面 470 m 下市田・中谷 410 m  
大沢川沿い 480 m 市田港周辺 420 m 中学校南洞 510 m 月夜平 660 m 上段道路 700 m



道ばたに生えた  
タチイヌノフグリ



草むらに生えた  
タチイヌノフグリ

タチイヌノフグリ

ヨーロッパ・アフリカ原産で、世界中に外来種（帰化植物）として分布しています。オオイヌノフグリに似ていますが、茎が直立しており、和名の由来となっています。茎は直立して高さ10～30cmになります。花期は4月から6月、花は直径4mmで花が小さい上に、開花している時間が短いため目立ちません。町内の道ばた、畑、荒地などに普通に自生します。

主な生育地と標高

国道山吹交差点 440 m 山吹・越田 580 m  
下市田・中谷 420 m ほたるパーク山吹周辺 440 m  
月夜平 660 m 山吹駅 439 m

## 野趣豊かなノイチゴ類



### モミジイチゴ

モミジイチゴ (6月中旬)

バラ科の落葉小低木。高さ1mほどです。山地の林縁に普通に自生します。和名はモミジに似た葉をもつイチゴという意味です。4、5月ごろ、白い5弁花をつけ、6月ごろに実は黄色に熟し、味がよいです。町内の80か所ほどで生育を確認しました。

#### 主な生育地と標高

下市田親水公園 420 m 国道山吹交差点 440 m  
新田・青木ヶ沢 710 m 高森公園 770 m  
不動滝駐車場 1,060 m



### ニガイチゴ

ニガイチゴ (6月中旬)

バラ科の落葉小低木。山地の林縁に自生します。地下茎で盛んに繁殖し、高さは約50cm、まれに1mを超えます。4～5月に開花し、実は赤色に熟します。食べられますが、核が苦く感じられる個体があり、ニガイチゴの名がついたのです。山野に普通に自生し、町内で50か所余りで生育確認しました。

#### 主な生育地と標高

吉田城址 480 m 山吹・新田原 580 m  
田沢大橋西 750 m 林道吉原線 980 m  
吉田山山頂付近 1,450 m



### ナワシロイチゴ

ナワシロイチゴ (7月上旬)

バラ科の落葉低木。日本各地の原野や路傍にごく普通に自生します。高さ30cmぐらいいちになりませんが、普通横に長くは、茎の長さは1.5mぐらいに達します。5～6月に開花し、淡紅紫色の5弁花を数個ずつつけます。6月ごろ濃い赤色に熟して食べられます。町内では36か所の自生地を確認しました。

#### 主な生育地と標高

下市田親水公園 420 m 国道山吹交差点 440 m  
新田・青木ヶ沢 710 m 高森公園 770 m



### クマイチゴ

クマイチゴ (6月下旬)

バラ科の小低木。山の斜面や谷間などに自生します。高さ1～2m。4～5月に白色5弁花をつけ、6月ごろに果実が黄色に熟しますが、甘みがあり食用となります。クマが食べることからこの名があります。町内では15か所ほど自生を確認しました。

#### 主な生育地と標高

林道吉田線 710 m 大沢川沿い 715 m  
新田諏訪神社 620 m 林道不動滝線 790 m  
高森カントリークラブ西 880 m  
林道小沼大沢線 1,000 m

初夏に花咲くスイカズラ科ウツギ類



■ ヤブウツギ ヤブウツギ

山地に生える落葉低木。ハコネウツギ（植栽）やニシキウツギの花は白から赤へ変色し、タニウツギ（北信に分布）はかわいらしい淡いピンク色ですが、ヤブウツギの花色は蕾のつぼみのうちから濃いピンクです。葉裏や花冠外面が毛深いのが最大の特徴です。別名ケウツギ、ピロードウツギ。和名は枝が密生し、藪になることに由来しています。

主な生育地と標高

林道小沼大沢線 1,000m 林道弓矢沢線 900m



■ ハコネウツギ（栽培種） ハコネウツギ

別名はベニウツギ、日本各地の海岸近くに自生する落葉低木。花期は5～6月頃、白い花が次第に赤へと変化します。名前に箱根が付きますが、箱根にはわずかしか自生していません。町内には自生はしていませんが、植栽されているので、ヤブウツギ、ニシキウツギとの比較のために掲載しました。



■ ニシキウツギ ニシキウツギ

日本の特産種、高さ約5mに達します。花期は5～6月です。普通、花の色は初めは白色でのちに赤色に変わるので、ニシキウツギの名がつけましたが、初めから白色や赤色で、変化しないものもあります。花冠は漏斗状で長さ2.5～3.5cm、毛を散生します。子房はほとんど無毛です。果実は円柱形、2片に割れます。ハコネウツギとよく似ていますが、町内ではニシキウツギは自生していますが、ハコネウツギは自生していません。

主な生育地と標高

林道不動滝線 770m 林道弓矢沢線 980m  
本高森山登山路 1,220m 林道小沼大沢線 920m  
山吹・増野 700m 林道吉田線 960m



ニシキウツギの確認地点

## 特異な花を咲かせるツツジ類

### バイカツツジ

高さ1～2mほどの落葉低木。6～7月、前年の枝の先端近くにやや小形の白色花を開きますが、新葉に隠れてあまり目立ちませんが、花冠は5裂して平開し、径約2cmで上面に紅紫色の斑点があります。

山地に広く生え、北海道から九州に分布しています。町内では雑木林やアカマツ林に産します。和名は、花がウメの花を思わせることからです。晩秋には紅色に色づき、切り花として格好の花材になります。



バイカツツジの花



バイカツツジの紅葉



バイカツツジの確認地点

### ヒカゲツツジ

常緑低木で高さ1～2m。4～5月、クリーム色ないしは淡黄緑色の花を2～5個開きます。花冠は径3～4cm。山地の崖などの斜面に生え、関東地方以西の本州から九州に分布し、東海地方にまれに自生しています。庭木や盆栽にされます。和名のヒカゲツツジは日陰に多く生えること由来します。別名はサワテラシ。

#### 主な生育地と標高

本高森山登山路 1,230 m

吉田山 1,000 m



ヒカゲツツジ



## 古くからの香辛料



サンショウの熟した実



花



未熟な実



幹

### ■ サンショウ

ミカン科の落葉低木。日本、朝鮮半島の原産で北海道～九州まで分布します。町内では段丘崖や林縁、林内に生育しています。雄株と雌株があり、春に花を咲かせて雌株は果実を付けます。

古くから親しまれている香辛料で、新芽、若葉、蕾、果実などを食用として利用します。

若い芽は「木の芽」と呼ばれ、和え物や煮物、五平餅用の味噌などに入られます。清涼感のある辛みと独特の香りがあり、青い果実は佃煮などに利用されます。熟してはぜた果実の皮の部分を粉にしたものがウナギの蒲焼きなどでおなじみの粉山椒です。サンショウの木のすりこぎ棒は、播るたびに木が微量に削られて香りが料理を引き立て、また、解毒作用もあるといわれます。

#### ■ 主な生育地と標高

山吹・下平橋 450 m 山吹・増野 700 m  
 順礼沢 520 m 林道不動滝線 825 m  
 林道吉田線終点 870 m

### ■ イヌザンショウ

日本固有の落葉樹。葉や種子が料理に使われるサンショウに比べて香りが悪く、役に立たないという意味でイヌザンショウと名付けられました。ミカン科の落葉低木でサンショウに似ていますが、刺が1本で互い違いについて、葉には悪臭があるので簡単に区別がつけます。サンショウ同様にアゲハチョウの食樹です。小さい木なら幼虫一匹で食べ尽くしてしまいます。

#### ■ 主な生育地と標高

大沢川沿い 480 m 胡麻目川沿岸 480 m  
 出原二又沢橋付近 640 m  
 林道不動滝線 590 m



イヌザンショウ



花



## 野原や道ばたに生える帰化植物のツメクサ類



■ **ムラサキツメクサ**

ムラサキツメクサ

家畜飼料として広く栽培されます。土壌を肥沃にする根粒菌による空中窒素固定作用も評価されており、そのため、緑肥としても利用されます。花は集合花序で2～3cmと大きいです。



■ **シロツメクサ**

シロツメクサ

和名は江戸時代にオランダから贈られたガラス製品の包装に詰められたことに由来します。明治時代以降、家畜の飼料用として導入されました。窒素を固定することから緑化資材にもなります。



■ **クスダマツメクサ**

クスダマツメクサ

和名は花序が薬玉のように見えることに由来します。また、受粉後に花弁が大きくなり、ホップの雌花に似ていることからホップツメクサともいいます。河川敷や市街地の空き地にしばしば群生します。



■ **コメツブツメクサ**

コメツブツメクサ

和名はシロツメクサに似ていますが、小さいことに由来します。地面をおおうように生えます。よく似たコメツブウマゴヤシは、葉に毛が多く、花が終わると花弁が落ちます。



ツメクサ類の比較

### ツメクサ類の根

根についている  
つぶつぶは根粒菌。



 「…ウツギ」と呼ばれるアジサイ類



 **ウツギ** ウツギ

アジサイ科の落葉低木。「卯の花の匂う垣根に…」とうたわれる卯の花は本種です。各地の山野に自生し、河岸や岩場などにみられます。ウノハナは陰暦4月（卯月）に開花するからです。庭木や生垣に栽培されたり、また材が堅いため木釘、つまようじ、小鳥の止り木などをつくるのに利用されます。町内では丘陵帯～低山帯下部に産します。



 **ノリウツギ** ノリウツギ

アジサイ科の落葉低木で、高さ3mに達するものもあります。7～8月、枝先に多数の両性花と、それに混ざって少数の装飾花をつけます。装飾花は3～5個の花弁状の萼片<sup>がくへん</sup>から成り、白色でまれに帯紅色のものもあります。樹皮の粘液から、日本紙をすくときに使用する糊をつくります。ノリウツギおよび別名のノリノキはそれに由来します。町内では林縁や草地に普通に産します。



 **バイカウツギ** バイカウツギ

アジサイ科の落葉低木で、幹の高さは約2m。6～7月、枝先にやや大きい白色花をつけます。バイカとは梅花のことで、花が美しく、また香りがあるので、観賞用として広く栽培されています。葉をもむとキュウリの匂いがします。町内では、低山帯下部～低山帯上部<sup>ひすいのさわ</sup>に生え、大島川干水ノ沢や不動滝周辺などに生育しています。



「ウツギ」の意味は

ウツギは「空木」であって、幹が写真のように中空になっているものにつけられた名です。「…ウツギ」とよばれる植物には、以上3種のアジサイ科の他に、コゴメウツギ（バラ科）、ツクバネウツギ（スイカズラ科）ミツバウツギ（ミツバウツギ科）、フジウツギ（ゴマノハグサ科）などがあります。



ウツギ 幹



## 開花期に葉が変色するマタタビ類



マタタビ



ミヤママタタビ



マタタビの花



マタタビの果実

### マタタビ

日本の山野に自生し、高さ5mくらいになります。花期は6～7月、雄株と両性花の株とがあります。新枝の上部の葉腋ようえきにウメに似た白色の5弁花を下向きに開きます。葉は開花期に表面が白色に変わります。果実は長楕円形で先が細まり、長さ約2.5cmで9～10月に黄熟し、食べられます。全木をネコ科の動物が好み、食べると一種のめいてい状態となります。果実にタマバエの一種が寄生して虫こぶをつくりますが、漢方ではこれを木天蓼もくてんりょうと称し、漢方薬および民間薬として、体を温めたり腹痛や腰痛に用います。

#### 主な生育地と標高

本高森山登山路 1,084 m 山の寺キャンプ場 900 m  
林道二又沢線起点 665 m 林道吉田線 820 m  
高森カントリークラブ東 740 m  
林道小沼大沢線 1,025 m

### ミヤママタタビ

マタタビに似ていますが、本種は茎の髄に階段状の空所があり、葉は卵形で基部が心臓形となります。雌雄異株しゆういしゆで両性花もあり、5～6月、径約1.5cmの白色花を開きます。この時期に近くしんかくの葉が紅白色となります。果実は長楕円形で約2cm、8～9月に黄緑色に熟し食用となります。本種はネコがとくに好むことはありません。マタタビより高所に生育します。

#### 主な生育地と標高

本高森山登山路 1,150 m  
大島川本沢 1,060 m 不動滝駐車場 1,060 m

### 2種の葉の比較



マタタビ

ミヤママタタビ

マタタビもミヤママタタビも開花期には花の付近の葉が変色します。マタタビは白色に、ミヤママタタビは紅白色になります。この現象は雨期で目立たない花に虫を誘引するためといわれています。花後は変色した色がなくなります。



## 梅雨に花咲くアジサイ類

### ヤマアジサイ

山あいの沢沿いに多く生えるのでサワアジサイとも呼ばれます。高さ約1mほどで群生します。6～7月に開花。周囲の装飾花は径2～3cm、萼片は3～5枚あり花弁状で大きく、白または青色で紅色のものもあります。中央の両性花は小さく、おしべは約10本、花柱は3～4本です。小さい蒴果<sup>さくか</sup>を結び、秋には小鳥が実をついばみにきます。

主な生育地と標高

林道小沼大沢線 775 m 大島川干水ノ沢<sup>ひすいのさわ</sup> 1,200 m  
山の寺キャンプ場 875 m 林道吉田線 870 m



ヤマアジサイ

### タマアジサイ

日本固有で、やや陰湿な林下に群生します。茎は高さ1.5mぐらゐ。花期は7月～9月で、苞に包まれ玉状になった蕾<sup>ぼう</sup>が裂けるように開花します。淡紫色の小さな両性花の周りに花弁4枚の白色の装飾花が縁どります。タマアジサイの涼しげな花は、夏から秋の花として人気があります。和名は蕾のときに花全体が球状をしているところからきています。

主な生育地と標高

山の寺キャンプ場 875 m 林道二又沢線終点 785 m  
林道吉原線 960 m

球のような蕾



タマアジサイ

### コアジサイ

日本固有で、山地に生えますが、観賞用として庭園にも栽植されます。高さ60～150cm。初夏、枝先に青紫色の小さな両性花を半球状に密につけます。上記の2種は虫を呼ぶために装飾花がありますが、コアジサイにはありません。この花は、ほのかな甘い匂いで虫を呼ぶと言われています。派手な装飾がない分、梅雨のジメジメした時期に涼しげな印象を与えます。

主な生育地と標高

天白公園 635 m 林道出原線終点 910 m  
山吹・増野 700 m 新田原 580 m  
林道吉原線 960 m



コアジサイ



## 林縁・林内に生えるツツジ類



ネジキの花



ナツハゼの花



ネジキの果実



ナツハゼの果実

### ■ ネジキ

落葉低木または小高木。幹がねじれるのでネジキの名がつけられたのです。5～6月、下部に小さな葉をつけた長さ約5cmの総状花序をつくり、壺型の白色花を下向きに列をなして開きます。果実は小球形の蒴果で上を向きます。やや乾いた山地に生え、岩手県以西の本州から九州に分布します。枝葉は有毒です。赤色で美しい冬枝は挿し花に用います。材は赤褐色を帯びて緻密で堅く、木曾のお六櫛ろくしの材料にします。

#### ■ 主な生育地と標高

林道出原線 740 m 林道小沼大沢線 950 m  
 干水ノ沢 1,170 m 越田原 760 m  
 新田・青木ヶ沢 710 m 本高森山登山路 1,310 m  
 月夜平 660 m

### ■ ナツハゼ

日本、朝鮮半島、中国に分布する落葉低木。日当たりのよい山地に普通に生え、幹は高さ1～2mとなり、よく分枝します。葉は互生し、長さ3～8cmの広卵形で先はとがります。5～6月に枝先に総状花序を出し、淡黄赤褐色の鐘状の小花を多数つけます。花冠は長さ4～5mmで先は浅く5裂、果実は球形の液果で径6～7mm、黒褐色に熟します。

#### ■ 主な生育地と標高

林道吉原線 1,000 m 林道小沼大沢線 1,025 m  
 山吹・増野 700 m 大沢川沿い 500 m  
 大島川本沢 1,080 m 天白公園 640 m  
 本学神社 680 m

 小鳥がついばむ実をつける木々



実をつけたアオハダ



実をつけたアズキナシ



アオハダの花



アオハダの削られた青い肌



アズキナシの花



ハカリノメの由来の皮目

**アオハダ**

モチノキ科 モチノキ属の落葉高木。北海道から九州の明るい山地に生えます。町内では、段丘崖から低山帯上部の林縁によくみられます。雌雄異株しゆういしゆであるので、雄株は実をつけません。高さは8mほどになり、5～6月に緑白色の花を咲かせ、9～11月に直径7mmほどの赤い果実をびっしりつけます。長い期間、実を着生させているのは、小鳥に種子を散布させたいからとされます。

アオハダの名前の由来は「青い肌」。アオハダの樹皮を薄く剥ぐと青い肌が見えます。そのため「青肌」と表記されます。かつてアオハダから出る樹脂でトリモチを作っていたといわれます。

主な生育地と標高

山吹 500 m 吉田城山 547 m  
山吹・増野 700 m 新田・青木ヶ沢 710 m  
林道小沼大沢線 770 m 前高森山 1,634 m

**アズキナシ**

山地に普通に生えるバラ科の落葉高木。町内では雑木林の林縁にみられます。高さは15mほど、花が葉の上に出て咲くため、花時にはよく目立ちます。また、秋から冬に赤い実をたくさんつけるので、この時期もよく目立ちます。実は12月末ぐらいまでついていてムクドリなどが騒がしく採食する様子が見られます。

和名はヤマナシに似た樹で、小豆のような実をつけることから。「ハカリノメ」という別名があります。等間隔の白い皮目が、物差しが目盛りをイメージさせるからです。端整な樹形、清楚な花、秋にできる赤い実など観賞性が高いため、雑木の庭に好んで使われるようになり、密かな人気があります。

主な生育地と標高

駒場～新田 520 m 牛牧浄化センター南斜面 520 m  
新田諏訪神社 620 m 牛牧・役人平 725 m



## 優雅な花を咲かせるホトトギス類

山野に自生するホトトギス類は、伊那谷では、ヤマジノホトトギス、ヤマホトトギス、タマガワホトトギス、ホトトギスの4種が自生していますが、暖温帯性のホトトギスは飯田市以南に限られています。

### ヤマジノホトトギス

林縁や林内にふつうに生育します。一見するとヤマホトトギスとよく似ていますが、花被片は水平に開き、花柱にはヤマホトトギスのような斑点がなく、雌しべの先端にだけ斑点があるので、容易に区別ができます。



ヤマジノホトトギス

### ヤマホトトギス

林縁や林内にふつうに生育します。よく似たヤマジノホトトギスとの違いはヤマジノホトトギスの花被片は水平に開くのに対し、ヤマホトトギスは、大きく反り返ります。また、花柱に斑点があります。



ヤマホトトギス

### タマガワホトトギス

日本固有種で、本州、四国、九州に分布し、山地の沢沿いや湿った林内など、水気のある場所に生育します。7月から9月に黄色い花をつけます。

#### 主な生育地と標高

不動滝駐車場 1,060 m 大島川本沢 1,080 m  
本高森山登山路 1,560 m



タマガワホトトギス

### ホトトギス

飯田市以南の湿った斜面に生育します。水が滴るような崖地に見られます。ヤマジノホトトギスなどに比べ草丈や花姿が大きく、多数の花をつけた姿は美しいので、庭先で栽培されます。



ホトトギス



## 夏の高原を彩るカバノキ類



シラカバ

### シラカバ

白い樹皮が美しく高原のシンボルとして愛されます。伐採地や山火事跡地などの陽地に群生。4～5月、開葉と同時に、雄花の尾状花穂が短枝の先からたれ下がり、雌花の花穂は小枝の先に上向きにつきます。9～10月、果穂は円柱形でたれ下がり、褐色に熟します。材は器具、燃料、樹は庭木とし、樹皮を細工物とします。町内では800～1,700 mに生育。吉田山～本高森山の山地に自生しています。



ダケカンバ

### ダケカンバ

本州や四国では亜高山帯に、北海道では低地から生えます。樹皮は赤褐色～灰褐色。5～6月に開花し、雄花穂は黄褐色で枝先から尾状にたれ、雌花穂は短枝の先に直立します。果穂も直立し、9～10月に熟します。材は近年、家具、内装、合板、パルプなどに用いられるようになりました。町内では吉田山～本高森山の標高1,200～1,890 mに自生します。



ウダイカンバ

### ウダイカンバ

本州中部・北部の山地に自生。葉は柄をもち、やや長い心臟形。樹皮は黄褐色または灰褐色で横長の皮目があります。5月ごろ、尾のように垂れ下がる雄花と雌花をつけます。樹皮が雨中でもよく燃えるので、<sup>たいまつ</sup>鶴飼いの松明に用います。外観と加工性に優れ、建築・家具・器具材に使われます。町内では標高700～1,300 mの山麓・山地に自生します。

### 3種の葉の形



ダケカンバ

シラカバ

ウダイカンバ



## 田んぼの畔や河岸に咲く多年草

### ■ ヤブカンゾウ

ススキノキ科の球根性多年草。原産地は中国で、日本では本州以南の野原や藪などに群生します。町内では田んぼの畔や道ばた、草むらに珍しくないです。3倍体のため結実せず、<sup>ほふくけい</sup>匍匐茎（ランナー）を出して広がります。草丈は約 80cm で葉は細長く、7～8月に茎頂にユリに似た八重咲きで橙赤色の花を開きます。根は黄色、末端は塊状です。

別名は「ワスレグサ」「カンゾウナ」。

#### ■ 主な生育地と標高

山吹駅付近 439 m ほとるパーク山吹西側 437 m 山吹・市田ウォーキングコース 442 m 下市田親水公園 416 m 吉田南城址 500 m 下市田工場団地東 417 m



ヤブカンゾウ

### ■ ノカンゾウ

ススキノキ科の球根性多年草。日本では本州以南の原野などに群生します。ヤブカンゾウに比べて、やや自然の豊かな雑木林の縁や野原に生育します。多年草ですが、冬季には地上部の葉が枯れます。草丈は約 80cm、葉は狭長で、花は7～8月に茎頂にユリに似た橙赤色の花を開きます。花弁は6枚、根は黄色、末端は塊状です。

#### ■ 主な生育地と標高

萩山神社 500 m  
胡麻目川沿い 505 m  
山吹・市田ウォーキングコース 470 m  
駒場新田線 550 m  
やすらぎ荘北西の谷（市の沢） 540m 松岡城址銚子ヶ洞 480 m



ノカンゾウ



ヤブカンゾウ・ノカンゾウの確認地点

### ■ ユウスゲ

ススキノキ科の多年草。和名は花が夕方に開き翌日の午前中にしぼむこと、葉がスゲに似ていることに由来します。別名「キスゲ」。町内では河岸や土手に生育します。花期は7～9月。夕方に花を開き、翌日の午前中にしぼむスズメガ媒花です。蒴果は広楕円形で長さ約 20 mm で先端がへこみます。種子は長さ約 5 mm、黒色の卵形で光沢があります。

■ 主な生育地と標高 大沢川沿岸 475 m



ユウスゲ



## 秋の草原を飾るノギク類



ユウガギク

### ユウガギク

日本固有種で、日当たりのよい草地や道ばたなどに生える多年草。地下茎をのぼしてふえるので、群生することが多いです。草丈 50 ~ 150 cm、開花期は 7 ~ 10 月、花序は散房花序、花冠は頭花、花色は白~薄青紫で花径 2.5 cm です。瘦果に冠毛が発達しません。花を潰すと柚子の香がするのが名前の由来です。



リュウノウギク

### リュウノウギク

日本固有種で、日当たりのよい所に生え、高さ 30 ~ 60cm になります。低山の森林周辺に多く、特に林縁部の日向に生えます。全体に白い毛があり、茎や葉に竜腦りゅうのうのような香りがします。花期はヨメナやノコンギクなどより遅い 10 ~ 11 月です。茎がひよろりとして頼りないですが、栽培用のコギクにとってもよく似ています。



ノコンギク

### ノコンギク

道ばたや道路脇、畑の周辺にもよく出現しますが、山道や溪流沿いでも普通に見かけます。高さ 50 ~ 100cm。まばらに粗い鋸歯きょしがあります。8 ~ 10 月に開花し、頭花は径 2.5cm ぐらいです。周縁の舌状花は碧紫色または紫色で、中心花は黄色です。果実に長い冠毛があります。いわゆる野菊を代表する種類の一つです。



ゴマナ

### ゴマナ

山地の林縁や草地に生える茎の高さ 1 ~ 1.5 m ほどの多年草。山の寺の参道などでよく見かけます。9 ~ 10 月、多数の小さな頭花をつけます。くせが無くよい香りがするので、若芽、若い茎を摘み取り天ぷらにしたり、塩茹して水にさらしてあえもの、おひたしにします。和名は葉が胡麻の葉に似ることによります。



## 触れるとかぶれるウルシ類

野山に入るときには長そでや長ズボンは必須ですが、装備が十分でも肌が露出していたところにウルシが接触してしまったり、誤って触れてしまい肌がかぶれてしまうことがあります。町内でかぶれる樹種にはヤマウルシとツタウルシ、ウルシがありますが、ここでは山野に多いヤマウルシとツタウルシについて記します。

### ヤマウルシ

ウルシ科の落葉小高木。ヤマウルシは山地に生え、ウルシより小形。葉は卵形の小葉からなる羽状複葉で、枝先に集まって互生し、秋に紅葉します。雌雄異株で、6月ごろ黄緑色の小花が円錐状につきます。実はやや丸く、黄褐色の毛が密生。北海道～九州の低山地～丘陵に生え、町内では林内に普通にみられます。

#### 主な生育地と標高

新田・青木ヶ沢 670m 高森公園 770m  
本高森山登山路 1,230m 月夜平 660m



若葉のヤマウルシ



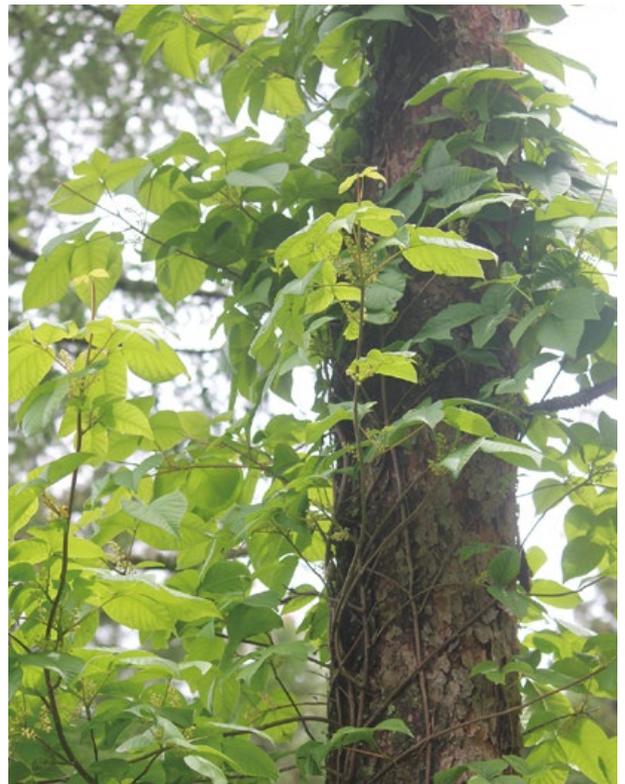
紅葉したヤマウルシ

### ツタウルシ

ウルシ科の落葉つる植物。高木などの幹に気根を出して巻き付き、這い上がります。葉は互生し、3出複葉で、長い柄があります。初夏、黄緑色の小花を開きます。核果は扁球形で、径5～6mmで、淡黄色に熟します。樹液に毒性があり、毒性はヤマウルシより強いです。晩秋に赤や黄色に紅葉します。北海道から九州の山地に普通に生えます。

#### 主な生育地と標高

牛牧浄化センター南斜面 520m 順礼沢 490m  
新田諏訪神社 620m 山吹・新田原 600m  
泰山神社 500m 高森公園 770m



樹木を這い上るツタウルシ



実をつけたツタウルシ



古くから利用されてきた民間薬



ドクダミの群落

ドクダミの集合花



開花したゲンノショウコ



ドクダミ茶



ゲンノショウコの果実

■ ドクダミ

ドクダミ科の多年草。本州～沖縄、東南アジアに分布し、平地の林下や道ばたに生えます。全草に臭気があります。6～7月、花弁状の4枚の白い総包葉の上に淡黄色の小花を多数穂状につけます。全草を煎じて、利尿、駆虫薬とし、生葉を化膿、創傷に貼るなど広く用いられ、ドクダミ茶もスーパーなどで販売されています。いろいろな効能が知られているので、十薬の名があります。

■ 主な生育地と標高

松岡城址間ヶ沢 500 m 林道弓矢沢線 760 m 吉田城址 547 m 泰山神社 500 m 新田・青木ヶ沢 710 m 山吹・正木 635 m 高森公園 770 m

■ ゲンノショウコ

フウロソウ科の多年草。北海道～九州、東アジアの草地に生えます。全体に軟毛があります。葉は対生し、幅3～7cmで深く3～5裂します。夏～秋、花柄の先に1対の花をつけます。白または紅紫色の5弁花で径1～1.5cm。茎葉の乾燥したものを煎用すると下痢止めとしてよく効くので「現の証拠」の名があります。また、果実が神輿みこしのような形で種子を飛ばすので、ミコシグサの別名もあります。

■ 主な生育地と標高

山の寺キャンプ場 880 m 林道弓矢沢線 950 m ほたるパーク山吹周辺 440 m 田沢大橋西 750 m 林道弓矢沢線 800 m

## 有毒なつる性多年草のガガイモ類



イケマの花



イケマの袋果

### イケマ

野原や林縁に自生し、茎は細長くつる状に伸びます。花は7～8月に開き、葉腋から出た長い柄（長さ6～12cm）の先に白い花を集めます。長さ8～11cmの紡錘形の袋果をつくり、その中に冠毛を持つやや扁平な種子を多数含みます。全草、特に植物体を傷つけたときに出る白い汁（乳液）は有毒です。誤食した場合、軽症でも嘔吐、重症では痙攣が起こる事があります。和名はアイヌ語のイケマ（巨大なる根）に由来します。

#### 主な生育地と標高

林道弓矢沢線 750 m 山の寺キャンプ場 900 m  
林道矢沢線 800 m 林道吉原線 1,080 m  
山の寺観音沢 954 m

### イケマとアサギマダラ

蝶のアサギマダラは、イケマの葉の裏側に産卵して、その幼虫が葉を食べて育ちます。幼虫は鳥などの外敵から身を守るため、イケマの毒を体内に蓄積するといわれます。



ガガイモの花



袋果と種子

### ガガイモ

山野に生え、長い地下茎からつる性の茎を伸ばし、長心臓形の葉を対生します。日当りのよい平地から低山地の草原で普通にみられます。茎や葉を切ると白い汁が出ますが、これにはアルカロイドという毒が含まれていて有毒です。花は淡紫色で小型、萼も花冠も5裂し、花冠の裂片の先は外側にそり返ります。果実は披針形で表面にいぼがあり、長さ約10cm、幅約2cm、中に絹糸状の毛のある平らな楕円体の種子があり、風で飛散します。種子の毛は綿の代用として、かつては印肉や針刺しに使用されました。

#### 主な生育地と標高

牛牧砂防ダム付近 800 m 市田港周辺 420 m  
田沢川沿岸 475 m 天白公園 640 m  
万年橋付近 445 m



## 湿地に生える優雅な草花



ツリフネソウ



シロバナツリフネソウ



ツリフネソウの種子

### ツリフネソウ

山間の湿地に生えるツリフネソウ科の1年草。花はユニークな舟形で花柄の先にぶら下がって咲きます。花弁と萼片はそれぞれ3個からなり、下の萼片だけ大きく袋状に発達し、後方は細長く、くるりと巻いた距きよとなります。この距の中に蜜がたまり、長い口吻をもつ昆虫は正面から口吻を差し込んで蜜を吸うので受粉に貢献しますが、そうでないクマバチなどは距の側面に穴を開けて盗蜜してしまいます。

熟した果実はふれると急にはじけて種子を飛ばすので、属名の *Impatiens* は「がまんできない」の意味があります。種子は同じなかまのホウセンカに似た形です。

#### 主な生育地と標高

林道出原線起点 740 m 山吹・小沼 460 m 大沢川沿い 715 m 堂所橋南 725 m 林道弓矢沢線 950 m  
湯ヶ洞周辺 660 m 山の寺境内 780 m 林道不動滝線 1,000 m



キツリフネ

### キツリフネ

ツリフネソウ科の1年草。丘陵から山地にかけて分布し、水辺などのやや湿った薄暗い場所に自生します。茎は高さ30～80cmでよく分枝し多汁質。花期は夏から秋（山地では8月頃から、低地では9～10月）。葉の下から細長い花序が伸び、その先に3～4cmほどの横長で黄色い花が釣り下がるように咲きます。ツリフネソウの距きよは渦巻状になっているのに対しキツリフネの距は長く垂れます。葉はツリフネソウよりやや狭いです。

#### 主な生育地と標高

林道弓矢沢線 850 m 天白公園 630 m  
大沢川沿い 715 m 新田原 570 m 堂所橋南 725 m  
萩山神社 460 m 山の寺キャンプ場 880 m  
吉田城山 547 m 林道不動滝線床波沢駐車場 920 m



## 河原や石垣などに生える多肉植物



ツメレンゲ



ツルマンネグサ



枯死するツメレンゲ



結実しないツルマンネグサの花

### ツメレンゲ

ベンケイソウ科イワレンゲ属に分類される多年草。和名はロゼットの様子が仏像の台座（蓮華座）に似ており、かつロゼットを構成する多肉質の葉の先端が尖っていて、その形状が獣類の爪に似ることによって由来します。乾燥した岩だらけの場所が生育地であり、河岸や石垣、山地の岩の隙間に根を下ろして群生します。葉は小さく多肉質で、茎に群がってつきます。秋、白い小花を密につけます。多年生で、発芽から開花までおよそ三年ほどの年月がかかり、開花した株は結実後には枯死します。ただし、株の成長途上にその周囲に幾つもの子株を形成するので、次々開花して株がすぐに消えてなくなることはありません。ツメレンゲは、シジミチョウの一種で絶滅が危惧されているクロツバメシジミの主要な食草で、長野県および環境省指定の準絶滅危惧種です。

### ツルマンネグサ

ベンケイソウ科マンネグサ属に属する多年草。中国、朝鮮半島が原産です。日本にも帰化植物として定着しています。都市近郊に多く、河原や石垣などにもよくみられます。茎は紅色を帯び、花をつけない茎は地を這います。勢力が旺盛で、地を這うようにしてつぎつぎと増えていきます。花は直径1.5～1.7cm。裂開前の葯は橙赤色。日本のものはふつう結実しません。花期は6～7月。春先の新緑が美しく、暑さ寒さに強いことから、グランドカバーや屋上緑化に向いていて、注目を集めています。

#### 主な生育地と標高

ほたるパーク山吹周辺 440 m 明神橋北 430 m  
山吹量販店南東 438 m 中学校南・唐沢洞 510 m  
万年橋付近 442 m 国道山吹交差点付近 440 m



## 秋を彩るモミジ類



イロハモミジ

## ■ イロハモミジ

イロハカエデとかタカオカエデなどとも呼ばれます。日本では最もよく見られるカエデ属の種で、紅葉樹の代表種。本種より作られた園芸種も多いです。和名は、この裂片を「いろはにほへと……」と数えたことに由来します。秋には黄褐色から紅色に紅葉して散ります。葉はオオモミジやヤマモミジなどに似ていますが、本種の葉は一回り小さく、鋸葉のこぎりばが粗く不揃いなところで区別されます。

## ■ 主な生育地と標高

牛牧浄化センター南斜面 520 m  
田沢大橋西側 750 m 林道不動滝線 770 m  
干水ノ沢 1,200 m やすらぎ荘北西 530 m

一般にモミジといえばカエデ類のイロハモミジとヤマモミジ、オオモミジをさします。ヤマモミジは日本海側に分布しており、町内には自生していません。町内にはイロハモミジ、オオモミジが自生し、安養寺や松岡城址などにも植栽されています。この他に町内ではカエデ類としてウリカエデ、ウリハダカエデ、コハウチワカエデ、ハウチワカエデ、イタヤカエデ、アサノハカエデなど、20 数種が自生しています。



オオモミジ

## ■ オオモミジ

イロハモミジから自然発生した変種で、北海道から九州まで日本全国の丘陵あるいは山地に見られます。イロハモミジに次いで日本の代表的なカエデで、園芸品種も多いです。母種のイロハモミジとよく似ますが、葉の縁が細かい単鋸齒たんきよしなのと、葉が大きいことで区別できます。翼果よくかはほぼ水平に開き、若いうちは薄紅色になり美しいです。

## ■ 主な生育地と標高

不動滝～駐車場 1,060 m  
本高森山登山路 1,220 m 林道吉田線 710 m  
林道吉田線 820 m 高森公園 770 m

## 2 種の葉の比較



イロハモミジ

オオモミジ

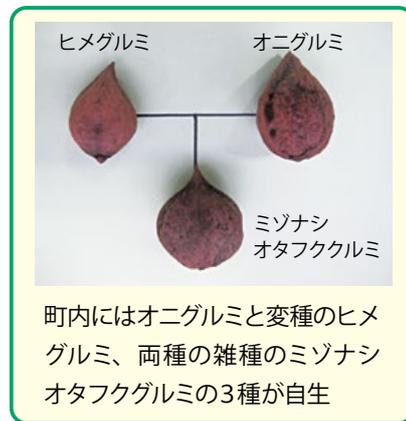

 秋の山の果実


果実がなっているオニグルミ



雌花花穂→

←雄花花穂



町内にはオニグルミと変種のヒメグルミ、両種の雑種のミゾナシオタフクグルミの3種が自生


 オニグルミ

クルミ科の落葉高木。各地の山野の溪流沿いに多く生えます。高さ20m以上に達するものもあります。雌雄同株で、花は5月ごろ咲き、雄花穂は長さ15～30cmの黄緑色で前年の枝から垂れ下がり、雌花穂は新枝の先に直立します。果実は径約3cmの球形で密に毛におおわれ、殻には深いしわがあり非常に堅いです。果実は滋養があり、当地方でも店で販売されています。材は家具・器具材とされ、樹皮は草木染めに用いられます。


 主な生育地と標高

オニグルミ：大沢川沿い 500 m  
追分・正木 545 m 南小学校 527 m

高森公園 770 m

ヒメグルミ：唐沢川河口 442 m

下市田親水公園 415 m 吉田城山 547 m

ミゾナシオタフクグルミ：山吹・原城 500 m



クリの果実



クリの花穂


 クリ

丘陵帯～低山に生える落葉高木。日当りのよい肥沃な土地を好み、高さ17mほどになります。6月ころ花が咲きます。花にはむせるような甘い香りがあり、多くの虫が集まります。果実はイガで包まれており、成熟すると裂けて落ちます。クリタマバチはクリの新芽に産卵し、虫こぶをつくって芽の成長を止める恐ろしい害虫ですが、日本ではクリタマバチ抵抗性品種を栽培して対応しています。


 主な生育地と標高

胡麻目川沿岸 520 m 湯ヶ洞線北斜面 490 m 林道出原線 880m 牛牧・小木曾洞 800m



## つる性多年草のヤマノイモ類



ヤマノイモのむかご



ヤマノイモの芋

### ヤマノイモ

一般に栽培されているものをナガイモといい、自生しているものをジネンジョ（自然薯）といいます。里山の林道沿いや河川沿いの土手によく自生します。ジネンジョは夏には葉腋から穂状の花序を付けます。果実は大きな3つの陵があり、それぞれの陵が中に種子を含んでいます。地上部の成長にしたがって種芋は縮小し、秋には新たな芋と置き換えられます。地上部が枯れる頃が芋の収穫時期です。枯れ残った蔓を目当てにして山芋を探し、芋を掘るには深い穴を掘らねばならないので大変です。芋は円柱形で表皮は灰黄褐色。内部は白色で粘りけがあり、擦ってとろろ汁にするほか、煮食、菓子材料などにします。つるにできるむかごは直径1cmほどの球状から、大きなもので長さ3cmほどに達します。

#### 主な生育地と標高

下市田工業団地東河原 420 m  
牛牧浄化センター南斜面 520 m 山吹・下平 440 m  
林道小沼大沢線 920 m



花と実をつけたオニトコロ



オニトコロの果実

### オニトコロ

単にトコロともいいます。日本特産で、原野や林縁に普通に生え、北海道から九州にかけて分布しています。根茎は横に伸び、やや肥厚しますが硬いです。花期は7～8月。花は単性で雌雄異株。雌花序は下垂し、蒴果は3枚の翼さくかからなります。1室に2個の種子があります。根茎は肥厚しますが、ヤマノイモや、畑で栽培されるナガイモのようにイモ状の塊根にはなりません。肥厚した根茎には強い苦みがあり有毒です。ヤマノイモの葉は対生で細長いですが、オニトコロの葉は互生で、幅広く丸っこい形が特徴です。

#### 主な生育地と標高

山の寺境内 770 m 林道小沼大沢線 775 m  
山吹・新田原 570 m 順礼沢 520 m

## 木に登り、岩や壁に張りつくツタ類



緑色の葉のナツツタ (夏)



紅葉したナツツタ (秋)

### 主な生育地と標高

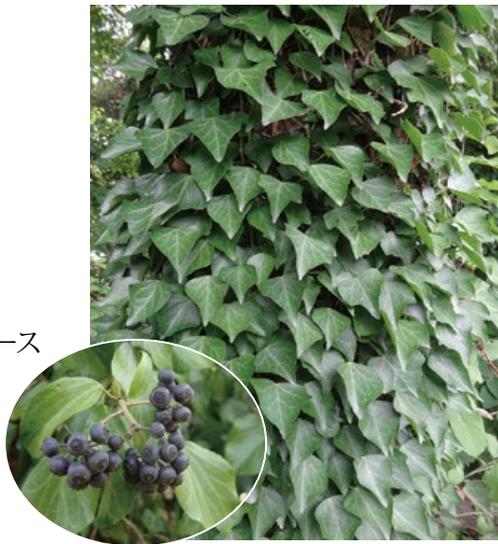
牛牧浄化センター 560m  
 田沢川沿岸 500m  
 新田・青木ヶ沢 710m  
 高森公園 770m  
 天白公園 640 m  
 萩山神社南洞 480 m  
 南小学校駐車場 527 m  
 山吹駅周辺 460 m  
 林道吉田線起点 664 m

### ナツツタ

ブドウ科のつる性落葉木本。日本・朝鮮・中国に分布します。巻きひげには吸盤があり、山野の岩や樹に着生します。夏、葉腋に黄緑色の小花をつけ、液果は小球形で紫黒色に熟します。秋の紅葉が美しいので家屋の外壁や石垣に這わせたり、盆栽にして観賞されます。「ツタ」の名称は他の植物や岩に「つたって」伸びる性質に由来します。ナツツタの名は、ウコギ科キツタをフユツタと呼んだため、その対比で呼ばれたのです。ナツツタは建物の外壁を這わせ、装飾として利用されます。

### 主な生育地と標高

胡麻目川沿岸 480 m  
 下市田 4 区洞 470 m  
 萩山神社 500 m  
 胡麻目川沿岸 505 m  
 山吹・市田ウォーキングコース  
 460 m  
 山吹駅北 480 m  
 松岡城址 460 ~ 520 m



果実をつけたフユツタ



樹木をよじ登るフユツタ

### フユツタ (キツタ)

ウコギ科キツタ属のつる性常緑木本。落葉性のツタ(ブドウ科)に対し、常緑性で冬でも葉が見られるのでフユツタ(冬蔦)です。ウコギ科の常緑つる性低木で、東アジアの温帯に広く分布し、山野に生えます。岩やほかの木の樹幹にからみつき、気根をだして、樹木や岩の上などに這い登ります。古木になるとかなり太い幹になり多数の気根を伸ばして、岩や木の表面にしっかりと付着します。観葉植物として広く栽培されます。別名キツタといわれます。



## 秋の山野の甘い果実



アケビの花



アケビの実



白いものはエライオソーム

### アケビ

山野に自生する半常緑樹の蔓性植物<sup>つるせい</sup>。茎は蔓になって他物に巻き付き成長します。町内では天竜川の河岸や雑木林の林縁に生育します。初夏に開花し秋には果実をつけます。名は実が熟してぱっくりと縦に口を開けることから、「開け実」の意で名付けられたといわれています。熟した果実はそのまま食べることができます。果実は乳白色のゼリー状で、甘味があり、黒い小さな種がたくさん入っています。種子にはエライオソームがついていて散布に役立っています。果皮や若芽も山菜として利用されます。

アケビの種子



ミツバアケビの花

### ミツバアケビ

アケビとともに秋の味覚として親しまれています。3枚の小葉があることからミツバアケビと呼ばれます。花期は4～5月、アケビよりも花の色は濃い紫色です。果実は厚い果皮に包まれ、ずんぐりした繭形になります。新芽と果実は食用とされ、つるは弾力があり丈夫でしなやかであることから、籠編みの材として最高品といわれ、多くの生活用具に利用されます。

### 3種の葉の比較



アケビのなかまには、アケビ、ミツバアケビと両種の雑種のゴヨウアケビの3種類があり、葉で見分けられます。アケビは小葉5枚からなる掌状複葉で、小葉は楕円形で縁に鋸齒がありません。ミツバアケビは小葉が3枚で、縁に波状の大きな鋸齒があります。ゴヨウアケビはアケビとミツバアケビが混生しているところで見いだされることが多く、アケビに似て小葉は5枚で、ミツバアケビに似て縁に鋸齒があります。

## 古典園芸植物のヤブコウジ類



### ■ ヤブコウジ

日本全土、東アジア山地の林などに生えます。町内では杉林、竹林などに自生します。細くて長い匍匐茎<sup>ほふくけい</sup>があり、カーペット状に群生します。高さ20cm程度。夏、白色で径7mmほどの花が下垂します。果実は球形で、秋～冬に赤熟します。観賞用として庭に植えられ、古来多くの園芸品種がつくられました。

■ 主な生育地と標高 下市田4区洞 475 m

南大島川北斜面 530 m 順礼沢北斜面 510 m

ヤブコウジ 山吹・市田ウォーキングコース 442 m 竜口八幡神社 450 m

### ■ マンリョウ

暖地の山林中に生え、高さ50cm～1m。葉は長楕円形で厚く、縁に波状のぎざぎざがあります。花は白色で7月頃に咲き、小枝の先に散形花序をつけます。果実は液果で10月頃に赤く熟し、翌年2月頃まで枝に見られます。正月にセンリョウなどととも飾られます。

■ 主な生育地と標高 南大島川北斜面 530 m

萩山神社 500 m 大丸山公園 530 m

子安神社 510 m 下市田4区洞 470 m

順礼沢 520 m



マンリョウ



カラタチバナ

### ■ カラタチバナ

暖地の山林中に生え、高さ50cm～1m。町内では常緑広葉樹林の林床にまれにみられます。葉は長楕円形で厚く、縁に波状のぎざぎざがあります。夏、白い小花を散房状につけ、実は球形で赤く熟し、翌年春まで木に残ります。中に1個の大型の種子が入っています。マンリョウによく似ていますが、マンリョウより寒さに弱く、町内での露地栽培は難しいです。長野県指定の絶滅危惧種。

### 古典園芸植物とは

江戸時代に日本で育種・改良され、独自の発展を遂げた園芸植物。また、明治時代以降でもその美的基準において栽培・育種されている植物の総称。上記の3種は古典園芸植物で正月の縁起物ともされ、マンリョウ「万両」、カラタチバナ「百両」、ヤブコウジ「十両」とも呼ばれる。金額が大きいほど、たくさんの赤い実をつけることが知られる。

ひっつき虫と呼ばれるオナモミ類



オオオナモミ



二つに割ったイガオナモミ 空の実と種子

イガオナモミ・オオオナモミ

キク科オナモミ属の1年草。北米原産の帰化植物。果実は楕円形で、たくさんの棘をもっており、先端部には特に太い棘が2本あります。2種は果実も茎葉も同じような形をしており、一般に混同されています。町内ではオオオナモミは河原や草地などの砂地に、イガオナモミは天竜川の砂礫地に見られます。

果実は最初は緑色で、熟すると灰褐色となり棘も堅くなります。この棘は、果実の中にある種子を動物に食べられないように守る役割があるものと思われます。成熟した果実は何かに接触するなど、少しの衝撃で根本からはずれます。また、棘は先端が釣り針のようにかぎ状に曲がっていて、動物の毛にからみつきやすいです。そのため、果実の棘は動物の毛にからみついて運んでもらう役のほうが大きいと考えられます。事実、オナモミのなかまは強力な“ひっつき虫”であり、そのやぶを通れば、たいていどんな服でもからみついてきます。

一つの果実の中には大小2つの種子が入っており、翌春に1個の種子が発芽しますが、もう一方の種子は時期を遅らせて夏遅く発芽します。河原などの不安定なところで生育するための、発芽時期の危険分散なのでしょう。



イガオナモミ・オオオナモミの確認地点

イガオナモミとオオオナモミの比較

イガオナモミは葉が巨大で、基部はほぼ水平に直線的に広がる切形です。

オオオナモミの葉は基部が心形のように反って広がります。



イガオナモミ



オオオナモミ

イガオナモミの実はおオオナモミより大きく丸みを感じられ、多数ある棘から更に細かい棘が分岐して生えるため、細かい毛が密生しているように見えます。

オオオナモミは細かい棘がなく、すべすべしています。



## クロウメモドキ科の落葉樹



開花したケンポナシ

### ケンポナシ

すらりと背の高い落葉高木。花期は6月頃で、新枝の葉腋に集散花序をつけます。9～10月、球形無毛の核果をつけますが、果柄は肉質で枝状となり、甘く食べられます。冬季に雪上に落下した果柄はハクビシンやタヌキなどの獣の格好の食料になることにより、種子の分布範囲を拡大し発芽率が上昇することになるのです。和名のケンポナシはテンポナシ(手棒梨)がなまったもので、ふくれた花序の柄に由来します。材は木目が美しく狂いが少ないので装飾材に用います。

#### 主な生育地と標高

山吹・下平 440 m 山吹・垣外 510 m  
大沢川沿い 480 m 胡麻目川沿岸 480 m  
竜口八幡神社 450 m 山吹・唐沢川沿い 443 m  
山吹量販店南東 438 m



ケンポナシの種子

ケンポナシの果実



鈴なりに果実をつけたクマヤナギ



クマヤナギの果実

### クマヤナギ

クロウメモドキ科のつる性落葉低木。日本全土の山野に普通に生えます。花は白色で、7～8月、枝先に多数がつき大形の円錐花序になります。果実は核果で、緑色ののち赤色に変わり、翌年の夏、黒く熟し甘く食用となります。枝は丈夫で、かんじきの材料などになります。葉や枝を煎じて健胃整腸剤とします。冬は葉を落とし、黒々とした幹やつるがクマを連想するところからクマヤナギの名が付きますが、ヤナギとは別の植物です。

#### 主な生育地と標高

吉田南 480 m 林道小沼大沢線 775 m  
天竜自動車学校東 420 m 山吹・越田 570 m



## 神事に使われる樹木



サカキ

### サカキ

サカキは本州中南部以西に生育するモッコク科の常緑広葉樹。「<sup>さかき</sup>榊」という漢字が示すとおり、神事に用いられるため、神社境内で植栽されることが多いです。光沢があって水平に広がる枝葉は、紙垂を付けて「玉串」とし、神前に供えるのに扱いやすいです。名は、年中、葉が青く栄えていることから「栄える木」、これが転じてサカキとなったという説や、神の世界と人間界の境に植える木を意味する「境木」からサカキとなったという説があります。こうした背景から玉串として神棚に使われます。町内では暖地性のサカキは自生は少ないですが、萩山神社のように境内に植えられて活用され、それが逸出して、周辺に生育しているのもあります。

#### 主な生育地と標高

下市田 4 区洞 475 m 萩山神社 400 m  
出原・中里 640 m 南大島川北斜面 530 m



ヒサカキ

### ヒサカキ

モッコク科の常緑小高木。サカキが手に入らない関東地方以北は年間を通じて艶のある葉をつけるヒサカキは縁起の良い木とされ、神棚へ供える玉串に使われます。

#### 主な生育地と標高

山吹 480 m 萩山神社 500 m  
竜口八幡神社 500 m



ソヨゴ

### ソヨゴ

当地方では神事にソヨゴが使われます。ソヨゴはモチノキ科の常緑小高木で、身近な林でよく見受けられます。果実は 5～6 cm の柄があってぶら下がり、直径 7mm ほどの球形で、10～11 月に赤く熟します。晩秋から早春までついている実が美しいです。しかし、雌株であっても、近くに雄株がなければ結実しないのです。

### 3 種の葉の比較



サカキ

ヒサカキ

ソヨゴ

高森町やそれ以北の寒冷な地方ではサカキは育ちにくいいためヒサカキ、ソヨゴを代用する。



## 樹皮がはがれるヤシャブシ類



果実をつけたミヤマヤシャブシ



←雌花の花穂

←雄花の花穂

花穂

### ミヤマヤシャブシ

カバノキ科の落葉小高木。高さ7mに達します。樹皮は暗灰色で、粗く割れます。葉裏に毛が生えているものがミヤマヤシャブシで、毛が生えていないものがヤシャブシです。雌雄同株。3月ごろ開花します。果穂は短枝の先に1~2個つき、表面の粗い松かさ状で長さは2cmです。堅果は楕円形、両側に狭い翼があります。名は果穂の表面が粗いのでヤシャ「夜叉」、果穂がヌルデの虫こぶ（五倍子）と同様にタンニンを含むことからヤシャブシ（夜叉五倍子）となったそうです。根に根粒菌がついて荒地でもよく生育するため、砂防用に緑化材として植栽されます。



オノオレカンバの幹



落ち葉



オノオレカンバで作ったお六櫛ろくし

### オノオレカンバ

オノオレカンバは漢字で「斧折樺」と書き「斧が折れるほど硬い」という特徴から名付けられた落葉樹木です。オノオレカンバは標高800m以上の岩肌に根を張り、光を受けるために、峰から張り出しています。別名ミネバリはこんなことに由来します。1mm幹が太くなるのに3年かかるため、非常に硬い性質を持つ樹木です。町内では吉田山や大沢川沿いに、まれにみられます。成長が遅い分、繊維が緻密でキメ細かく、耐久性の高さ、滑りにくさなどの特徴も持つことから、櫛や印材として人気があります。この木を材として作る木祖村の「お六櫛」は有名です。



屋敷の大樹 イチイ科の常緑針葉樹



実をつけたイチイ



果実をつけたカヤ



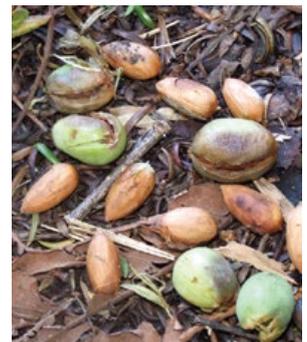
イチイの花



イチイの果実と種子



カヤの花



落下した果実

■ イチイ

大きいものは高さ 20m ほどになります。日本全国に分布し、町内では、深山に自生したり、また、耐陰性、耐寒性があり刈り込みにもよく耐えるため、庭木や生垣に活用されています。山吹新田の光明寺には幹回 2m ほどの大木があります。雌雄異株（稀に雌雄同株）で、4 月ごろ小形の花をつけ、初秋に赤い実をつけます。種子は球形で、杯状で赤い多汁質の仮種皮の内側に収まっています。外から見れば、赤い湯飲みの中に丸い種が入っているような感じです。果実は甘く、そのまま食用にしたり、焼酎漬けにして果実酒が作られます。しかし、種子には有毒のアルカロイドのタキシン (taxine) が含まれています。種子を誤って飲み込むと中毒を起し、量によっては痙攣を起こして呼吸困難で死亡することもあるため注意が必要です。

主な生育地と標高

子安神社 470 m 不動滝直上 1,080 m  
山吹駅西方 480 m 田沢川南岸 670 m

■ カヤ

山地に生え、大きいものでは高さ 35 m にも達します。耐陰性が強く、日陰でもよく育ちます。暖温帯性の樹木で、段丘崖～低山帯下部に生育します。町内では、山吹の中島や山吹の小沼に大樹が育っています。雌雄異株で 4～5 月に開花します。果実は秋に紫褐色に熟し、種子は食用となります。そのままではヤニ臭くアクが強いので、数日間アク抜きしたのち煎るか、土に埋め、皮を腐らせてから蒸して食べます。葉の様子がやや似ているイヌガヤは、枝が緑色で、葉が柔らかいのでさわっても痛くありません。

主な生育地と標高

子安神社 470 m 竜口八幡神社 450 m  
白髭神社 500 m 山の寺 770 m

## 常緑広葉樹のカシ類



アラカシ

### アラカシ

高さ 15 m に達す常緑高木。<sup>ほうが</sup>萌芽力が強く株立ちになりやすく、樹皮は灰黒緑色で若木では平滑です。葉は倒卵状長楕円形、長さ 6 ~ 12cm で革質。5 月ごろ雌雄の花序が新枝につき、当年の 10 月に堅果が熟します。宮城県以南に分布し、常緑カシ類中もっとも普遍的で岩石地でもよく乾燥に耐えるため急峻な崖地などに生育します。町内では丘陵帯から低山帯下部に多く生育しています。アラカシの名は枝葉の武骨な様子に由来します。



アラカシの確認地点



シラカシ

### シラカシ

大きいものは高さ 20m 以上にもなる常緑高木。樹皮は緑黒色を帯び滑らかですが、大木では粗くなります。葉の表面は光沢があり、裏面は灰白緑色。晩春、新葉とともに花を開きます。堅果は長さ約 1.5cm、殻斗は浅いお椀形<sup>わん</sup>で 6 ~ 8 層の横輪があり、基部に柄があります。福島県以西～鹿児島県までの丘陵地～低山帯下部に生え、町内では人家周辺に多いです。シラカシの名は材が白いことによりますが、樹皮が黒いことからクロカシともいいます。



シラカシの確認地点

伊那谷のカシ類はアラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、アカガシの 5 種が分布していますが、町内ではアラカシ、シラカシがよくみられます。近年の温暖化のためか、アラカシ、シラカシの生育地が北上しています。



## 雑木林のナラ類の落葉高木 (1)



上：クヌギの幹 下：どんぐり

上：アベマキの幹 下：どんぐり

### クヌギ

4～5月、黄褐色の花を開きます。果実はどんぐりの一種で丸く、翌年の秋、褐色に熟します。古くはこの実で衣服を染めたそうです。材は木炭、シイタケ栽培の原木とします。傷口からは樹液が溢出しやすくカブトムシなどの昆虫類が集まります。和名は「国の木」が語源とされるほど日本人には馴染みが深く、古事記や万葉集にもその名が登場します。

#### 主な生育地と標高

湯ヶ洞線北斜面 490 m  
 万年橋付近 445 m 山吹・増野 700 m  
 天白公園 630 m 山吹・越田 590 m

### アベマキ

夏、黄褐色の花が尾状の穂となって咲きます。樹皮はコルク、材は器具、薪炭材となります。名の「アベ」は岡山県の方言で、アバタの意味といわれます。クヌギと交雑したものはアベクヌギと呼ばれ、両親の中間的な特徴をもちます。伊那谷でも時折生育しています。秋にはクヌギに似た実になります。実だけでクヌギとアベマキを見分けるのは難しいです。

#### 主な生育地と標高

天白公園 630 m 月夜平 650 m  
 順礼沢 520 m 泰山神社 500 m  
 南小学校 527 m  
 松岡城址銚子ヶ洞 510 m

### クヌギ・アベマキ

町内の丘陵帯から低山帯下部にかけての段丘崖や公園にはアベマキ、クヌギが生えています。両種はよく似ていますが、クヌギに比べてアベマキは樹皮のコルク層がより発達し、葉の裏は、細毛が生えていて白っぽいです。

#### 2種の葉裏の比較



クヌギの葉裏  
アベマキの葉裏



クヌギの樹液を吸引するカブトムシとゴマダラチョウ

クヌギの樹液は、多くはボクトウガという蛾の幼虫が木の内部を食い荒らす事によって出るので。

## 雑木林のナラ類の落葉高木 (2)



コナラの堅果

コナラ

2種の  
葉の比較

フモトミズナラ コナラ

### コナラ

標高 1,000 m 以下の里山の雑木林はコナラがよく生育しています。この樹木は雑木林の主要な種で、薪炭林として 15 ~ 20 年ほどで繰り返し伐採されました。また、落葉は堆肥の原料、材はシイタケのホダ木に使われました。秋には細長い円形のドングリがたくさん実り、鳥類から哺乳類まで、多くの動物たちの食糧にもなっています。しかし、現代は、薪炭に利用されなくなり、コナラ林は放置され樹木が肥大したり、竹林に進入されたりして荒廃しているところが多いのです。

コナラの幹は、色々な虫に食われたり孔が開いたりして、樹液を垂らしたりします。その樹液が発酵して、甘酸っぱい匂いを発するので、クワガタやカブトムシ、ハチやチョウ、カナブンなどが集まってきます。そんな昆虫を求めて、子供たちでにぎわう夏がコナラ林の出番の時です。

### フモトミズナラ

モンゴリナラと長い間呼ばれていた木ですが 2006 (平成 18) 年にフモトミズナラと命名されました。

幹はコナラとよく似ています。葉の形はミズナラやカシワに似ていますが、葉裏は無毛。果実は楕円形の堅果で、ミズナラよりずんぐりしており、頭が凹んでいます。殻斗はミズナラと似ています。コナラにもミズナラにもよく似たところがあるので、コナラの亜種とする説とミズナラの変種とする説があります。葉も堅果(ドングリ)もコナラよりずっと大きいので容易に区別できます。

本州の丘陵地や低山に分布していますが、町内では山吹公園の南東斜面、標高 520 ~ 580m ほどのところに生育。伊那谷では飯田市川路や駒ヶ根高原にも生えています。



フモトミズナラの堅果

フモトミズナラ



温帯林の代表的な樹木 ブナ・イヌブナ



ブナの木



ブナの種子



ブナの発芽

■ ブナ

日本特産の樹木の1つで本州中部の山地では標高 1,000 ~ 1,500m 付近の温帯林を代表する樹木。樹高 20 ~ 30m で胸高直径 1.7m に達するものもあります。町内では前高森山~吉田山の稜線に生育します。本来ならば、なだらかな斜面に群落をつくりますが、町内では伐採を免れてきたものが尾根筋に張り付くように生育します。山吹公園に植栽されています。春に新枝の葉腋に尾状花序をなして多数の雄花が付き、雌花は葉腋に通常 2 個ずつつきます。果実は 3 稜形の堅果。材はパルプ材、家具材などに利用されます。



ブナの幹



イヌブナの幹

■ イヌブナ

ブナ科ブナ属の落葉高木。和名はブナより材質が劣ることから名付けられました。樹皮の色からクロブナとも呼ばれます。ブナより少し標高の低いところに生え、町内では標高 800 m ほどから出現します。ブナとの違いは、ブナの幹は灰色でつるつるしていますが、イヌブナは暗灰色イボ状の皮目が目立ち、ブナの葉脈が 7 ~ 11 対に対し、イヌブナは 9 ~ 14 対です。



2 種の葉の比較



ブナの葉 (表と裏)

イヌブナの葉 (表と裏)



## 在来種と帰化種の大型のユリ類



花をつけたウバユリ



ウバユリの果実



タカサゴユリの花



芽生えのウバユリ



ウバユリの種



タカサゴユリの果実



種の詰まった果実

### ウバユリ

本州、四国、九州の山地の林床に生育します。茎は高さ 50 ～ 100cm となり、濃緑色で三角状のハート形の葉を互生します。葉は茎の下部に集まってつく傾向があって、長い柄を持ち、葉の長さは 15 ～ 20cm もありますが、茎の上部につく葉ははるかに小さいです。夏に茎の上部が花序となり、数個の花を横向きにつけます。花は緑白色、6 枚の花被片からなるらっぱ形で、長さ 10 ～ 20cm です。花後に長さ 5cm ほどのずんぐりした円柱状の果実をつけます。なお、雪国に生じるものはさらに大型で、花も数多く咲き、オオウバユリという変種として扱われます。

#### 主な生育地と標高

山吹・市田ウォーキングコース 442 m  
 山吹・寺沢川沿い 480 m 胡麻目川沿い 505 m  
 松岡城址東斜面 470 m 林道不動滝線 1,060 m  
 山の寺 770 m 山吹・正木 640 m

### タカサゴユリ

台湾に自生し、観賞用に栽培されたものが野生化しました。近年、町内にも急速に広まってきて荒地、道ばた、堤防、高速道路のり面などに生育します。高さ 30 ～ 60cm。夏から秋にかけ、ラッパに似た形の筒状の帯黄白色の花を横向きに咲かせます。十数個もつけるものもあります。よく種子を<sup>みの</sup>稔らせ、風によって散布されます。発芽から8か月ほどで開花するので繁殖力が旺盛です。

#### 主な生育地と標高

山吹・小沼 468 m 天白公園 630cm  
 新田～高森カントリークラブ山道 670 m  
 南小学校周辺 520m 南大島川上橋付近  
 山吹・小沼 468 m

 キク科タンポポ属の多年草 タンポポ 3 種

■ シナノタンポポ

関東北部から中部地方に分布する日本在来のタンポポで、カントウタンポポの亜種です。町内では、自然が保たれている丘陵帯から低山帯



シナノタンポポ

下部の道端や野原に普通にみられます。セイヨウタンポポが乾燥地や荒地に多いのに対して本種は適度に湿り気のある富栄養地の田畔、土手などの草原に多いです。

■ 主な生育地と標高

下市田親水公園 416 m  
ほたるパーク山吹周辺 440m 山吹・新田 590 m  
高森公園 770 m 林道吉原線 1,000 m

■ セイヨウタンポポ

ヨーロッパ原産の帰化植物で路傍や市街の空地に雑草化しています。自然が破壊されてシナノタンポポが生育困難になった地に進出して繁



セイヨウタンポポ

殖するのです。セイヨウタンポポは日当たりが良い場所なら、荒地でも貧栄養地でも高地でも生育可能なのです。

■ 主な生育地と標高

明神橋北 430 m ほたるパーク山吹周辺 440m  
南小学校 527 m 山の寺境内 770 m  
林道小沼大沢線 1,000 m  
不動滝駐車場 1,060 m

■ シロバナタンポポ

関東以西の各地にみられる暖温帯性のタンポポです。関西地方では都会地周辺で最も普通なタンポポですが、町内ではまれに産します。頭花



シロバナタンポポ

が白色であるため他種との区別が容易です。総苞は先端に小さな角状の突起があり、外側のものは短くやや外側にそり返ります。町内ではやすらぎ荘付近の土手(540 m)に見られます。

■ シナノタンポポとセイヨウタンポポの比較

- 2種の花の接続部の総苞そうほうを注目してみると、その違いがよくわかります。セイヨウタンポポは萼片がくへんが反り返っていて、下を向いていますが、シナノタンポポは反対に萼片がピタッとくっついていて、上を向いています。



セイヨウタンポポ

シナノタンポポ

- シナノタンポポは春にしか開花しませんが、セイヨウタンポポは春から秋まで随時開花するため繁殖力が強いです。
- シナノタンポポは昆虫を媒介して受粉を行いますが、セイヨウタンポポは昆虫で受粉をせずに種を作ること(自家受粉)ができます。

## 在来種と帰化種のスミレ類



### スミレ

花（解放花）をつけたスミレ

在来種で道ばたや庭先に生える多年草。春には濃紫色の花びらのある花（解放花）をつけ、夏から秋には花びらのない花（閉鎖花）をつけます。和名は花の形が大工さんの使う墨入れに似ていることによります。

#### 主な生育地と標高

下市田親水公園南 416 m 松岡城址西 550 m  
万年橋南 445 m 林道不動滝線 860 m  
やすらぎ荘北西の谷（市の沢） 530 m

### エライオソーム

スミレ類の種子にはエライオソームという小さな白いものがついています。アリがこれを好みます。アリはこの種子を巣に運んで、エライオソームを取って、種子を巣の外に出します。これにより、種子散布が行われるのです。



アメリカスミレサイシン



ツマグロヒョウモン



根茎から伸びた閉鎖花

### アメリカスミレサイシン

明治以降に園芸植物として導入されたものが逸出帰化しました。冬も枯れずに人家近くの道ばたや空き地などで見られます。町内でも数十年前から生育し、それに伴いスミレ類を食草とするツマグロヒョウモンも北上してきました。根茎はスミレサイシンのように肥厚していて、名の由来になっています。スミレと同様に開放花と閉鎖花をつけます。



アメリカスミレサイシンの確認地点



## 侵略的外来種ワースト 100 に指定された多年草



セイトカアワダチソウ (下市田・天竜川河原 10月10日)



オオアワダチソウ (山吹駅構内 7月3日)

### ■ セイトカアワダチソウ

北アメリカ原産の帰化植物。茎は直立し、高さ2～3mになります。10～11月、多数の黄色の頭花を花序につけます。11月頃まで開花していることから、ミツバチの蜜源植物となります。セイトカアワダチソウは周辺の植物を駆逐して旺盛な群落をつくりますが、これは植物が成長の場を確保するために、根や葉などから他の植物の成長を抑制する物質を分泌するためです。この現象をアレロパシー（多感作用）といいます。セイトカアワダチソウはこの物質によって一旦は優勢になりますが、自家中毒を起こして衰退する傾向にあります。

### ■ オオアワダチソウ

北アメリカ原産の帰化植物。セイトカアワダチソウと比べると、本種は背が低く、葉や茎がザラザラせず、花穂の先端部分が曲がります。花期も早く、セイトカアワダチソウが咲く頃には花期は終わっています。セイトカアワダチソウのように大群落にもなりません。町内での本種の自生は少なく、下市田工業団地東河原 420 m、山吹駅構内 458 mの2か所ほどです。



セイトカアワダチソウの確認地点



### 日本の侵略的外来種ワースト 100 とは

日本生態学会が定めた日本の外来種の中でも特に生態系や人間活動への影響が大きい生物のリストです。このうち維管束植物は26種が指定されていますが、町内にはそのうち、アレチウリ・イタチハギ・イチビ・オオアレチノギク・オオアワダチソウ・オオオナモミ・オオキンケイギク・オオブタクサ・オニウシノケグサ・セイヨウタンポポ・カモガヤ・キシヨウブ・コカナダモ・シナダレスズメガヤ・セイトカアワダチソウ・ハリエンジュ・ハルザキヤマガラシ・ハルジオン・ヒメジョオンの19種が生育しています。



## 侵略的外来種ワースト100に指定された樹種



上：ニセアカシアの花 下：ニセアカシアの実

### ニセアカシア (ハリエンジュ)

北米原産のマメ科の落葉高木。初夏に白い花をつけ、枝には細かいとげがあります。

明治期に日本に入って街路樹として広まりましたが、外来種として多くの問題を発生させています。ニセアカシアが進入したことで、マツ林、ヤナギ林が減少し、溪畔域の景観構造を大きく改変させられました。ニセアカシアは単独で木本の生物多様性を低下させるだけでなく、好窒素性草本やつる植物をともなって優占し、植生を独自の構成に変えてしまうのです。また、20～30年成長すると倒木して、河川では洪水の折に二次災害を起こしたり、山地の斜面では土砂崩れの原因になったりします。

これらの悪影響を危惧し、日本生態学会は本種を日本の侵略的外来種ワースト100に指定したのです。

町内でも天竜川の河川敷や支流の河岸で繁茂しており、悪影響が危惧されます。



上：イタチハギの花 下：イタチハギの実

### イタチハギ

北アメリカ原産のマメ科の落葉低木。別名「クロバナエンジュ」。道端、河川敷、荒地など幅広い環境に生育します。根の土壌固定力が強く、マメ科特有の窒素固定による肥料木としても有用であるため、のり面緑化に利用されています。しかし、現在は野生化し繁殖力が強いので、他の植物に影響をおよぼす恐れがあります。



ニセアカシア・イタチハギの確認地点



## 花粉症の原因になる帰化植物



オオブタクサ

### オオブタクサ

キク科の一年草。別名「クワモドキ」。北アメリカ原産で、日本各地に帰化し、現在では市街地の空地や河岸などにしばしばみられます。町内でも確認地点図に示されるように耕作地や荒地に生育します。茎は直立して大きくなり、高さ3mほどになります。花は夏から秋に開き、雌雄同株です。雄花から飛散する花粉はブタクサと並んで花粉症の原因になることが知られ、大いに嫌われています。



ブタクサ・オオブタクサの確認地点



オオブタクサの種子



発芽したオオブタクサ



ブタクサ

### ブタクサ

キク科の一年草。北アメリカ原産で明治初期に渡来、現在では各地で雑草化しています。荒地に生え、高さ約1m。夏、黄色い花を穂状につけます。オオブタクサとともに花粉症の原因となります。



## 特定外来生物に指定されているキク科の多年草2種



オオハンゴンソウ

### オオハンゴンソウ

明治時代に観賞用として日本に持ち込まれた北米原産の多年草。公共工事後の緑化事業にも使われました。現在、野生化して全国に広がり、長野、福島、岐阜などの本州各県では高原の湿地帯に多く生育します。特定外来生物に指定されており、飯田市の大平高原では繁茂していますが、町内では野外での生育は少ないです。



オオハンゴンソウの確認地点



オオキンケイギク

### オオキンケイギク

北アメリカ原産の多年草で、日本ではワイルドフラワーに利用されていましたが、外来種として野外に定着してしまいました。現在、特定外来生物に指定されて、移動や栽培が禁止されています。天竜川河原に大群落をつくり、在来植物を駆逐するので問題になっています。繁殖力が旺盛で駆除に苦慮しています。



オオキンケイギクの確認地点

### 特定外来生物とは

外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがあるものと指定された生物。許可なく栽培・保管・運搬・輸入・譲渡を行うことが禁止されています。平成17年に施行された外来生物法では、16種の植物が特定外来生物に指定されていますが、そのうち町内には、オオハンゴンソウ、オオキンケイギク、オオカワジシャ、アレチウリの4種が生育しています。町内ではその4種のうち、オオキンケイギクとアレチウリの繁殖が旺盛で、抑制するのに苦慮しています。

河原や河岸に蔓延し除草困難な帰化植物



田沢川下流に繁茂するアレチウリ (8月)

アレチウリ

北米原産のウリ科の1年草。生育が非常に早いつる性植物。長さが数mから十数mになり、群生することが多く、丘陵～低山の河川敷、原野などに生育し、旺盛な成長力で蔓延し在来植物を圧倒します。花期は8～9月、花には吸蜜する虫が集まる密源植物です。花の後には白いトゲに覆われた実がなります。実は長さ1cmほどで長くて鋭い棘が密生し、金平糖のような形にかたまって結実します。触ると痛く、棘は細くて硬くしなやかなので、服を貫いて刺さることがあります。日本生態学会によって「日本の侵略的外来種ワースト100」に指定されています。また、環境省により駆除すべき「特定外来生物」にも指定されました。除草にやっかいな植物です。



花



果実



メリケンカルガヤ 冠毛をつけた種子



下市田親水公園に群生するメリケンカルガヤ (11月)

メリケンカルガヤ

北米原産で茎の高さ1mほどになるイネ科の多年草。近年、急速に広がり、町内にも進入してきました。土手や河川敷に群生し、冬季も枯れた草が直立しています。除草しようとしても根がしっかり張っていて、抜き取るのが大変です。今後、除草が困難な雑草になるでしょう。



アレチウリの確認地点



メリケンカルガヤの確認地点



## 有毒な帰化植物



果実をつけたヨウシュヤマゴボウ

### 主な生育地と標高

山吹駅周辺 460 m 松岡城址間ヶ沢 450 ~ 500 m  
 南小学校 527 m 吉田城山 547 m  
 牛牧浄化センター 560 m 天白公園 640 m  
 林道弓矢沢線 760 m 林道出原線 780 m

### ヨウシュヤマゴボウ

ヤマゴボウ科の多年草。別名アメリカヤマゴボウ。北アメリカ原産の帰化植物。草丈 2m 前後に達します。6 ~ 9 月にかけて白色ないし薄紅色の花からなる花穂を枝先に付け、夏季に扁平な果実を付けた後に初秋に黒く熟します。熟した果実は柔らかく、潰すと赤紫色の果汁が出ます。この果汁は強い染料で、衣服や皮膚に付くとなかなか落ちません。本種は有毒植物で、全草にわたって毒があり、果実も有毒です。毒性は、根 > 葉 > 果実の順ですが、果実中の種子は毒性が強いです。ブルーベリーと間違っ果実を誤食する事故もあり、注意が必要です。

### ヒレハリソウ

英名はコンフリー。ムラサキ科の多年草。ヨーロッパ・西アジアが原産です。高さ 70cm ほどで、全体に白色の短毛が生えます。6、7月、花穂をつけ、青紫色・白色などの小花を開きます。根や葉は薬用に、若葉は食用に用いられてきましたが、重篤な肝障害を起こすことがあるので、食用・服用が禁じられています。町内では荒地や草地に生えます。

### 主な生育地と標高

山吹 500 m 南小学校 520 m  
 越田原 760 m 山の寺境内 800 m



花をつけたヒレハリソウ



花をつけたジキタリス



蜜標の見えるベル形花

### ジキタリス

オオバコ科の2年草または多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物で、観賞用または薬用に栽培されます。高さ約 1m で全体白い綿毛でおおわれます。夏、茎頂に紅紫色で長さ 3 ~ 6 cm の長鐘形の唇形花が多数つきます。葉は強心成分を含み有毒です。葉の粉末から強心剤などを精製します。別名はキツネノテブクロ。町内では山の寺境内に生育します。



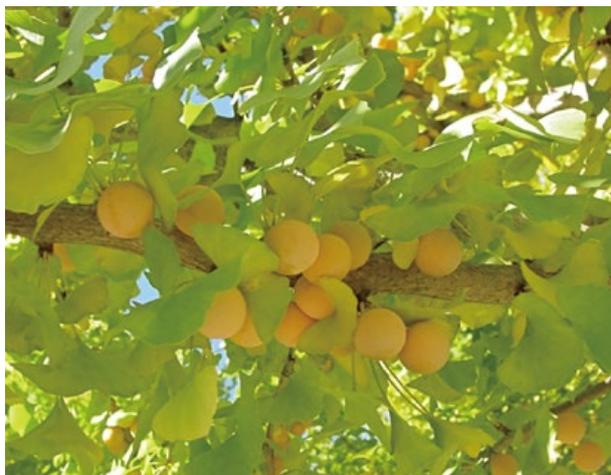
## 古代に栄えた樹種



雌花



雄花



イチョウの実（銀杏）



イチョウの大木



イチョウのいろいろな葉

### イチョウ

イチョウ科の落葉高木で、ルーツは中生代ジュラ期（1億5,000年以上昔）にまでさかのぼります。その後の氷河期に死滅しましたが、中国南東部で氷河期を生き抜いてきたわずかな種が、やがて日本に渡来して、世界各地に広がったのです。町内では社寺や段丘崖、川岸などに植栽されています。この樹木は人類によって復活した「生きている化石」といえます。11月の黄葉の時期、銀杏の実る時期にその存在が顕著になります。

主な生育地と標高 出早神社 615 m 南小学校 527 m 大沢川沿い 450 m

### ハリモミ

マツ科 トウヒ属の常緑針葉樹。樹形や葉の形状がモミ属に似ていますが、葉先が針のように尖っているためこの名があります。日本特産種で氷河期の遺存種です。福島県～鹿児島県の高隈山までの冷温帯に分布し、町内では南大島川沿岸（900 m）、吉田山の尾根筋（1,150 m付近）に産します。山の寺奥の戒壇不動・奥の院付近には数本の樹木が生育しています。山吹駅西方の祠の近くにも大木が生育していますが、これは江戸時代の昔、植栽されたものでしょうか。

ハリモミやトウヒなどのトウヒ属は熟した球果が枝から下垂落下しますが、モミ属の球果は枝の上に立ち上がり枝の先で壊れます。そのため、モミの球果は地上ではほとんど見ることはありません。



球果



幹



山吹駅西方に見えるハリモミ



## 絶滅危惧種に指定された草花



大島川の上流、渓谷に咲く  
イナサツキヒナノウスツボ  
平成 30 年 5 月

### イナサツキヒナノウスツボ

ゴマノハグサ科の多年草で日本固有種です。サツキヒナノウスツボの変種。母種は本州の関東地方（栃木県、埼玉県、東京都）から滋賀県、福井県と飛び離れて分布し、山地のやや日陰の林中に生育します。変種であるイナサツキヒナノウスツボは、中央アルプスの長野県伊那谷の標高 1,000～1,800 m の渓谷水辺に生育します。町内では谷川上流の湿った日陰にまれに産します。

和名は「五月雛の白壺」の意で、小さな壺形の花を白壺に見立て、ヒナノウスツボに似て、伊那地方の花が 5 月に咲くことから言われています。あまり目立たない草花ですが、長野県で絶滅危惧種 I B 類に指定されている伊那谷特産の希少種です。



湿った林縁に咲くカリガネソウ 平成 30 年 9 月

### カリガネソウ

シソ科の多年草で、山地の湿った林縁、沢沿いに生えます。全体に臭気があります。優雅な花の様子を、カリが飛んでいることになぞらえての和名です。別名ホカケソウ。長野県では準絶滅危惧種に指定されています。町内では 1 か所で見られません。

### 絶滅危惧種とは

現在、生存している個体数が減少しており、絶滅の恐れの高くて高い野生生物の種をいいます。環境省や都道府県でその指定を行っています。絶滅の危険性の程度によっていくつかのカテゴリー（範ちゅう）に分けられます。町内でみられる環境省の絶滅危惧種に指定されている植物に、エビネ、カザグルマ、オキナグサ、タガソデソウ、ツメレンゲなどがあります。

 絶滅危惧種に指定されたユリ類



ササユリ (6月 山の寺)



ヤマユリ (7月 山の寺)



ササユリの種子

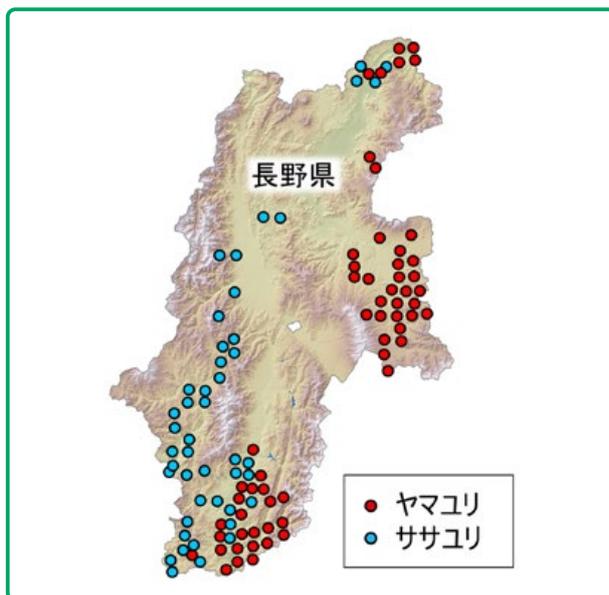
 ササユリ

日本固有種で、本州（中部地方以西）、四国、九州に分布し、西日本を代表する優雅なユリです。伊那谷では天竜川以西に多く自生します。ササユリの名は、葉が笹の葉に似ていることによります。初夏に開く花はうす桃色で、その優雅さは例えようがありません。10～11月頃に蒴果が熟し、種子は風に乗って広がります。初めて地上発芽するのは通常翌々年の春です（地下遅発芽様式\*）。初花を咲かせるまでに種子から約7年以上の歳月がかかります。ようやく開花しても、盗掘などの被害と重なり、個体数が減少しています。長野県では準絶滅危惧種に指定し、また指定希少野生動植物として保全を喚起しています。山吹の山の寺（隣政寺）では、地域住民とともにササユリの保全活動を行っています。

\* 地下遅発芽様式とは、秋に播種されると翌年にまずは地下で小さな球根をつくり、翌々年の春に芽生える発芽のタイプをいいます。ササユリやヤマユリはこのタイプです。

 ヤマユリ

ユリ科の多年草。日本固有種で本州（東北地方から近畿地方）に分布します。伊那谷では、天竜川の東側に多く産し、樹下や崖などに生育します。伊那谷はヤマユリとササユリの2種が自生する恵まれた地です。7月に咲くヤマユリの花は豪華絢爛で、栽培種で人気の高いカサブランカなどの交配親として重要視されます。自然の状態で里山に種が落ちて花が咲くまで育つ確率は1,000分の1と言われます。ヤマユリは・成長に年月がかかる・生育地が少ない・獣に球根が食べられる・人に盗掘されるなどで減少しています。ササユリと同様に県では準絶滅危惧種、指定希少野生動植物に指定しています。



長野県のササユリ・ヤマユリの確認地点

## 絶滅危惧種を保全しよう

長野県版レッドデータブックでは絶滅の危険度を示す基準として、環境庁（当時）によるレッドデータブックカテゴリー（環境庁 1997）を準用して、「長野県レッドデータブックカテゴリー」（2002）を定めました。これに基づいて県内の維管束植物を選定、その後、2014年に改訂しています。

カテゴリー	定義	略号
絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種	CR
絶滅危惧ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種	EN
絶滅危惧Ⅱ類	県内において野生での絶滅の危険性が増大している種	VU
準絶滅危惧	現時点での絶滅の危険性は少ないが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧種」として上位ランクに移行する要素を有する種	NT

長野県でそれぞれのカテゴリーに選定されている植物のうち、高森町内では次のものが見られます。

### 絶滅危惧ⅠA類



■エビネ



■カラタチバナ



■カザグルマ

### 絶滅危惧ⅠB類

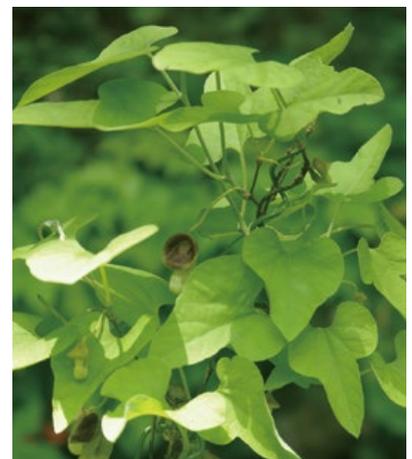


■イナサツキヒナノウスツボ



■オキナグサ

### 絶滅危惧Ⅱ類



■ウマノスズクサ

## 2. 高森町の植物

### 絶滅危惧II類



■イワオモダカ



■サネカズラ

### 準絶滅危惧



■コケイラン

### 準絶滅危惧



■スズサイコ



■センブリ



■フトムズナラ



■ユウスゲ



■ヤマユリ



■ササユリ

準絶滅危惧



■ タガソデソウ



■ タチキランソウ



■ マツグミ



■ カリガネソウ



■ ギンラン



■ キキョウ



■ ツメレンゲ